木　津　遺　跡

―国道４２４号道路改良事業に伴う発掘調査報告書―

2015年9月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

海南市木津所在の木津遺跡は、海南市東部を西流する貴志川が北東に流れを変えるあたりの左岸段丘上に位置します。

木津遺跡の周辺には下津野遺跡、岡殿屋敷跡、溝ノ口遺跡など、縄文時代から中世にかけての多くの遺跡が展開しています。

また、木津の地は『紀伊続風土記』に「古は材木運送の地なりし故名となれるへし」と記されていることから木材の積み出しの津として重要な地であったと考えられます。

公益財団法人和歌山県文化財センターでは、国道 424 号線の道路改良事業に伴い平成 26 年度に発掘調査を実施しました。ここでは、中世の生活遺構を発見し、往時の景観の一端を明らかにすることが出来ました。

平成 27 年度に出土遺物等整理作業を行い、このたびその成果をまとめることができましたので、発掘調査報告書として刊行する次第です。本書が県民の皆様のみならず、広く多くの方々の活用に資することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに本書の作成に当たり、御指導・御協力を賜りました関係各位、地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 9 月

公益財団法人　和歌山県文化財センター

理事長　櫻　井　敏　雄

例 言

1　本書は、和歌山県海南市木津に所在する木津遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は、国道424号道路改良事業に先立つもので、平成26年度に発掘調査業務を行い、同27年度に出土遺物等整理業務を実施した。
3　発掘調査及び出土遺物等整理業務は、和歌山県の委託を受けた公益財団法人和歌山県文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
4　発掘調査及び出土遺物等整理業務に要した経費は、和歌山県（海草振興局）が負担した。
5　現地調査に際し、海草振興局建設部海南工事事務所をはじめ、関係機関および隣接する地元の方々から多大なご協力を得た。
6　本書は、発掘調査業務担当者と協議のうえ、小林が執筆・編集した。
7　図版に使用した遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真は小林が撮影した。
8　発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
9　発掘調査及び出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調　査　組　織

事　務　局	**平成26年度**	**平成27年度**
事　務　局　長	嶋田　文紀	米田　良博
管　理　課　長	嶋田　文紀	米田　良博
埋蔵文化財課長	井石　好裕	土井　孝之
	発掘調査業務担当	**出土遺物等整理業務担当**
埋蔵文化財課	（技師）寺西　朗平	（非常勤専門調査員）小林　充貴

凡 例

1　遺構実測図及び地区割りの基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系(世界測地系)に基づき、値はm単位で使用している。又、図面に示した北方位は座標北を示す。
2　遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P.+）表示である。
3　発掘調査及び整理作業で使用した調査コードは、以下のとおりである。
　14－02・053　　(2014年度－海南市・木津遺跡)
　出土遺物・記録資料の整理にあたって、全て上記の調査コードを使用している。
4　遺構番号は、001番からの通し番号とし、必要に応じて末尾に種類（性格）を付した。
　なお、本書における遺構番号は、全て調査時のものをそのまま使用した。
5　本書の遺構・断面土層図は特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。
6　遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。
7　遺物実測図の縮尺は、土器類は原則として1／4で、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。遺物写真の縮尺は特に統一していない。
8　調査時の土層の色調・土壌の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修　小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(2010年度版)を使用した。
　土層名で2種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副となることを示す。

本文目次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……1
第Ⅱ章　位置と環境……3
　第１節　位置と地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……　3
　第３節　既往の調査……5
第Ⅲ章　発掘調査の方法と資料整理……6
　第１節　調査現場の記録作業……6
　　１　写真撮影作業……6
　　２　実測図作成作業……6
　　３　航空写真撮影・基準点測量……6
　第２節　出土遺物等資料の整理……6
　　１　出土遺物応急整理……6
　　２　出土遺物等整理業務……7
　　３　調査区の設定……8
第Ⅳ章　調査成果……9
　第１節　調査の成果……9
　　１　調査の概要……9
　　２　基本層序と遺構面……9
　　３　遺構検出面……　10
　第２節　各遺構……　10
　第３節　掘立柱建物跡……　15
　第４節　出土遺物……　18
第Ⅴ章　まとめ……　20
出土遺物観察表……　21
写真図版　検出遺構・出土遺物
報告書抄録・奥付

挿図目次

図１　木津遺跡と周辺の遺跡……　5
図２　調査位置と区画割（100ｍ区画）…　7
図３　調査範囲と地区割（４ｍ区画）……　8
図４　基本層序１……　9
図５　基本層序２……　9
図６　２溝断面土層図……10
図７　18 落ち込み状遺構断面土層図　……10
図８　50 溝断面土層図　……11
図９　４石組遺構出土状況図・
　　断面土層図……12
図10　50 溝瓦出土状況図　……12
図11　43 通路状遺構
　　出土状況図・断面土層図……12
図12　遺構全体平面図……13・14
図13　掘立柱建物２実測図……15
図 14　掘立柱建物３実測図　……15
図 15　掘立柱建物４実測図　……16
図 16　掘立柱建物５実測図　……16
図 17　掘立柱建物６実測図　……17
図 18　掘立柱建物７実測図　……17
図 19　1・2 区出土遺物実測図１　……23
図 20　1・2 区出土遺物実測図２　……24
図 21　1・2 区出土遺物実測図３　……25
図 22　1・2 区出土遺物実測図４　……26
図 23　1・2 区出土遺物実測図５　……27
図 24　1・2 区出土遺物実測図６　……28

表目次

表１　発掘調査・出土遺物等整理業務工程…　2
表２　木津遺跡と周辺の遺跡地名一覧　……　5

写真目次

写真１　１区　遺構掘削状況……　2
写真２　空撮風景……　2
写真３　現地説明会風景……　2
写真４　遺物への注記作業　……　7
写真５　遺物実測作業　……　7
写真６　写真整理作業　……　7

写真図版目次

写真図版１　調査地全景

１　調査地全景（真上から：上側が北）

写真図版２　１・２区調査区全景

１　１区調査区全景（東上空から）

２　１区調査区全景
（真上上空から：右側が北）

３　２区調査区全景（東上空から）

４　２区調査区全景（真上上空から:右側が北）

写真図版３　調査遺構

１　２溝完掘状況（東から）

２　２溝南セクション土層（東から）

３　４石組遺構検出状況（東から）

４　４石組遺構東西セクション土層（北から）

５　４石組遺構南北セクション土層（東から）

６　４石組遺構完掘状況（東から）

７　12 土坑セクション土層（東から）

写真図版４　調査遺構

１　18 落ち込み状遺構全景（南から）

２　18 落ち込み状遺構土層（北から）

３　34 土坑石出土状況（南から）

４　34 土坑土層（東から）

５　36 土坑完掘状況（南東から）

６　43 通路状遺構北側溝炭化物出土状況（西から）

７　43 通路状遺構出土状況（西から）

写真図版５　調査遺構

１　43 通路状遺構出土状況（西から）

２　43 通路状遺構土層（西から）

３　43 通路状遺構完掘状況（西から）

写真図版６　調査遺構

１　50 溝瓦出土状況（南から）

２　50 溝土層（南から）

３　71 溝土層（西から）

４　81 土坑土層（西から）

５　85 小穴遺物出土状況（東から）

６　133 柱穴土層（南から）

７　134 柱穴遺物出土状況（南から）

写真図版７　調査遺構

１　138 柱穴土層（東から）

２　166 柱穴遺物出土状況（西から）

３　171 柱穴土層（東から）

４　189 柱穴完掘状況（南から）

５　掘立柱建物１完掘状況（西から）

６　掘立柱建物１～７完掘状況（南から）

写真図版８　出土遺物１

写真図版９　出土遺物２

写真図版 10　出土遺物３

写真図版 11　出土遺物４

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

今回の調査対象となる国道424号は紀の川市から田辺市に至る一般国道である。全線にわたり内陸の山間部を縫うように走っており、比較的整備が進んでいる国道である。しかし、木津周辺は離合困難な区間であった。今回、和歌山県海草振興局建設部海南工事事務所（以下、海南工事事務所）により計画された国道424号道路改良事業に伴う工事予定地の一部が、周知の埋蔵文化財包蔵地である木津遺跡の範囲に該当したことから、和歌山県知事から平成26年1月9日付けの文書により文化財保護法第94条の通知が提出された。これを受け、和歌山県教育委員会が平成26年1月31日付けで確認調査が必要である旨を通知した。

その後、木津遺跡に該当する範囲について、和歌山県知事から平成26年2月18日付けで和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、県文化遺産課）は平成26年2月24日付けでこれを受諾、平成26年3月1日から平成26年3月18日にかけて国道424号道路改良事業に伴う木津遺跡試掘確認調査として調査を実施した。

その結果、工事予定地になっている範囲に埋蔵文化財の展開が確認され、また、周知の埋蔵文化財包蔵地になっている範囲外にあたる北側段丘斜面においても埋蔵文化財の展開が確認されたため、文化財保護法第95条、和歌山県文化財保護条例第17条及び同施行規則第9条第5項の規定に基づき、木津遺跡として周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲変更が必要となった。

その結果、海南工事事務所が国道424号道路改良事業に伴う木津遺跡発掘調査事業として当文化財センターに委託し、現地での発掘調査を実施した。

第2節　調査の経過

発掘調査工事は工事請負方式で行い、有限会社ユートピア建設に委託し、基準点測量及び航空写真撮影・図化は株式会社南紀航測センターに委託した。

航空写真撮影・図化は1区と2区及び農作業用通路部分をそれぞれ対象として2回実施した。また、基準点測量を実施し、3級基準点1点、4級基準点2点を設置した。航空写真撮影・測量では、調査遺構・調査区の遠景・近景及び俯瞰（垂直写真）などを撮影し、成果品の一部として納品されている。

発掘調査は排土置き場を確保する必要から、調査区を1区及び2区の2区画に分け、反転して実施した。当該調査区周辺の農地所有者から、海南工事事務所を通じて、調査区内を横断する農作業用道路について、調査期間内にこの通路を通行したい旨の要請があったため、農作業用通路部分は2区調査区に該当するが、2工区として1区と併行して調査を実施した。

平成26年12月20日から2区の調査を開始した。遺構面は一面で掘削作業、調査記録作業を行った後、平成27年1月24日にラジコンヘリコプターを使用した1回目の航空写真測量を行った（写真2）。

平成27年1月27日より2区の埋戻しを行いつつ、1区と農作業用通路部分の調査を開始した。遺構面は1面で掘削作業(写真1)、調査記録作業を行った後、平成27年2月14日に2回目の航

空写真測量を行った。全ての調査記録作業終了後に埋戻しを行い、平成 27 年 2 月 18 日に現地での調査を終了した。本調査面積は 2,389㎡である。

発掘調査は、第 4 層上面（基盤層）を遺構検出面とし、中世の遺物包含層である第 3 層の堆積がみられる部分は第 3 層上面まで、第 3 層の存在しない範囲は第 4 層上面から 10cm 上位までの第1･2層を機械により掘削した。人力掘削は、第 3 層以下第 4 層上面の遺構検出面及び遺構埋土の除去についてベルトコンベアを併用して実施した。

写真 1　1 区　遺構掘削状況

発掘調査と並行して応急整理作業（主に出土遺物洗浄作業）を行った。

この他、普及活動として、現地説明会を平成 27 年 2 月 8 日に実施し、約 40 名の参加者を得た（写真 3）。

写真 2　空撮風景

写真 3　現地説明会風景

表 1　発掘調査・出土遺物等整理業務工程

調査次数	年度	平成 26 年度（2014 年度）												平成 27 年度（2015 年度）											
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
現地調査期間	1 区			契約期間																					
	2 区									実施期間															
出土遺物等整理 報告書印刷期間含む														契約期間											
														実施期間											

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　位置と地理的環境（図１）

木津遺跡（図１の 53）は海南市木津に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は東西約 100 ｍ、南北約 100m に広がる。

海南市は、和歌山県北西部に位置し、西に紀伊水道を望む平野部と紀伊山地に連なる山塊に囲まれた山間部からなる。日方川河口に広がる平地はほとんどが近世以降の埋め立て地であり、現在は市街地となっているが、もとは入り江に形成された干潟、あるいは遠浅の海岸で、その景観に由来する黒牛潟の名が万葉集に詠まれた歌にみえる。

北は和歌山市と紀の川市に隣接し、東は紀美野町、南は有田市と有田川町に接する。いずれの方面へも山を越えての道のりとなり、現在国道 42 号が海岸線付近を南北に延長するほかは、亀ノ川流域と、国道 424 号が紀の川市方面へ延びる貴志川流域に狭小な平野が存在する。また、国道 370 号が船尾から木津付近を経て山間部を縫って橋本市まで延びる。気候は温暖で、ミカンや枇杷の栽培が盛んである。産業は伝統的なものとして黒江塗で知られる漆器製品、東子等家庭用品の生産がある。市域を流れる河川で最も流域面積の大きいものは貴志川で、紀美野町から西流し、本遺跡の北東付近においてヘアピン状に大きく屈曲した後、約 10km 北東方向に流れ紀ノ川に合流する。また、日方川及び亀ノ川が市域を東から西にかけて流れ、紀伊水道に注ぐ。

人口は約 53,000 人、面積は 101.06k㎡である。

第２節　歴史的環境

木津遺跡は、貴志川水系の左岸段丘上に所在し、これまでに瓦が出土していることから室町時代の遺跡と周知されている。海南市には日方川下流域、亀ノ川流域の平野部や貴志川水系の丘陵部に多くの遺跡が展開している。以下に周辺の遺跡について概略を記述する。

縄文時代

縄文時代の遺跡としては、西尾崎遺跡（31）、西尾崎東遺跡（32）、溝ノ口遺跡（33）、次ヶ谷遺跡（30）、亀池遺跡（29）、竜部池遺跡（28）、鰹田池遺跡、赤坂大池遺跡、大野中遺跡、小池遺跡、鳥居遺跡、且来Ⅰ・Ⅲ遺跡等がある。

溝ノ口遺跡は、貴志川右岸の河岸段丘上に立地する遺跡で、昭和 26 年に発見されて以来、昭和 40 年の大成高校郷土部による調査のほか、海南市教育委員会による昭和 56 ～ 61 年度にかけての６次にわたる調査及び平成６・10 年度における２度の調査、また平成６・７年度に当文化財センターが実施した発掘調査によって、縄文時代後期前葉から晩期、弥生時代、古墳時代及び古代・中世といった各時代の遺構・遺物が確認されたおり、複合集落遺構であることが判明している。また、平成６・７年度の調査では中世の鉄窯鋳造遺構も確認された。

鳥居遺跡では、紀勢本線の鉄道敷設工事に伴い多量の縄文土器や石器、土偶が発見されていたが、平成３年度に当文化財センターにより発掘調査を実施している。このとき縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が確認され、縄文時代後期後葉から晩期にかけての縄文土器が調査において出土した。

以上のことから、海南市一帯では縄文時代の早い時期から人々が生活の場としていたことが明らかであり、和歌山県内においても比較的縄文時代の遺跡が多く発見されている地域といえる。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、野上中南遺跡（34）、野上中遺跡（35）、田津原遺跡、滝ヶ峯遺跡、岡村遺跡、亀川遺跡、大野中遺跡、幡川遺跡、海南第二中学校校庭遺跡等がある。

岡村遺跡は、岡田八幡神社の西方、岡田に位置し、遺跡範囲は和歌山市本渡に広がる。亀ノ川により形成された沖積平野に所在する遺跡であり、これまで昭和 52 年度から平成 2 年度にかけて海南市教育委員会、和歌山県文化財研究会、当文化財センターにより複数次の発掘調査が実施され、主に縄文時代、弥生時代及び古墳時代の遺構･遺物が確認されている。これらの調査では、銅鐸形土製品や木製農耕具等が出土した。また、亀川遺跡の所在する亀川幼稚園建設地で方形周溝墓が検出されたほか、古墳時代の竪穴建物跡が確認されている。

大野中遺跡は、昭和 44 年度、平成 6 年度ほか数次の発掘調査が実施されており、弥生時代中期の竪穴建物跡等が検出されている。遺物は、縄文時代晩期の土器を始め、弥生土器や古墳時代の須恵器が出土した。野上中南遺跡は、平成 16 年度に調査が実施され、弥生時代中期とみられる竪穴建物跡等の遺構・遺物が確認されており、鎌倉時代に帰属するとみられる掘立柱建物跡や井戸等の遺構も検出されている。

古墳時代

古墳時代の遺跡としては、山崎山古墳群、室山古墳群、岡村古墳群、柿本神社古墳、奥の谷古墳、小野田古墳、薬勝寺南山古墳、且来下垣内古墳群、国主神社古墳群などが挙げられる。山崎山古墳群は現在消滅した古墳も多いが、40 基以上が存在したと考えられる。標高 69m の丘陵尾根上に立地する全長 45m(推定) の前方後円墳（5 号墳）が、埋葬施設や出土遺物の内容からこの古墳群の盟主的な地位にあるとみられ、5 世紀前半頃の築造と考えられている。

室山古墳群は、山崎山古墳群の西方に位置する標高 96.5m の丘陵上に所在する古墳群で、円墳 7 基の存在が確認されていたが、6 号墳のみ開墾により消滅し現存しない。1 号墳及び 2 号墳は内部主体が横穴式石室で、石棚、石梁を持つ。4 号墳では竪穴式石室、5 号墳では片袖の横穴式石室が確認されており、6 世紀後半頃から 7 世紀初頭までの時期に築造された古墳群であると考えられている。

古代

木津遺跡の所在する地域は、古代において那賀郡野上ノ庄に属していたとみられる。当該時期の遺跡は、且来遺跡群（且来Ⅰ～Ⅵ遺跡）、内池窯跡、願成寺経塚等が知られている。且来遺跡群では数次の発掘調査が実施され、平成 6・7 年度における且来Ⅵ遺跡の調査では掘立柱建物群等 7 世紀代の遺構・遺物が確認されている。

中世

木津遺跡周辺の中世の遺跡としては、岡殿屋敷跡(70)、中殿土居跡(80)、九品寺城跡(66)、下津野遺跡、下殿土居跡、小野田城跡等がある。岡殿屋敷跡は木津遺跡と同一の丘陵上に所在し、現地に城山の字名がみえる。また、下津野観音寺遺跡では中世の瓦等が出土している。

さらに、小野田城跡の南や且来遺跡群の近辺にも小規模な城郭跡とみられる遺跡が存在する。日方川下流域では、大野城跡、山名氏土居跡、春日山城跡、扇子ヶ城跡、岡田城跡、神田城跡、池崎城跡をはじめとする多数の城館跡が知られるところである。

大野城跡は、平成３～５年度にかけて発掘調査が実施されており、尾根上に築かれた連郭状をなす三段の曲輪、竪堀、土塁等を検出したほか、陶磁器や青磁、唐・北宋銭が出土しており、南北朝時代から織豊期までの 250 年間にわたり存続した城郭であったことがわかっている。このほか、禅林寺坊院跡は中世の寺院跡として注目される。

第３節　既往の調査

木津遺跡において、既往の調査は実施されていないが、和歌山県教育委員会による和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図には瓦の出土があり室町時代の寺院跡とされる。

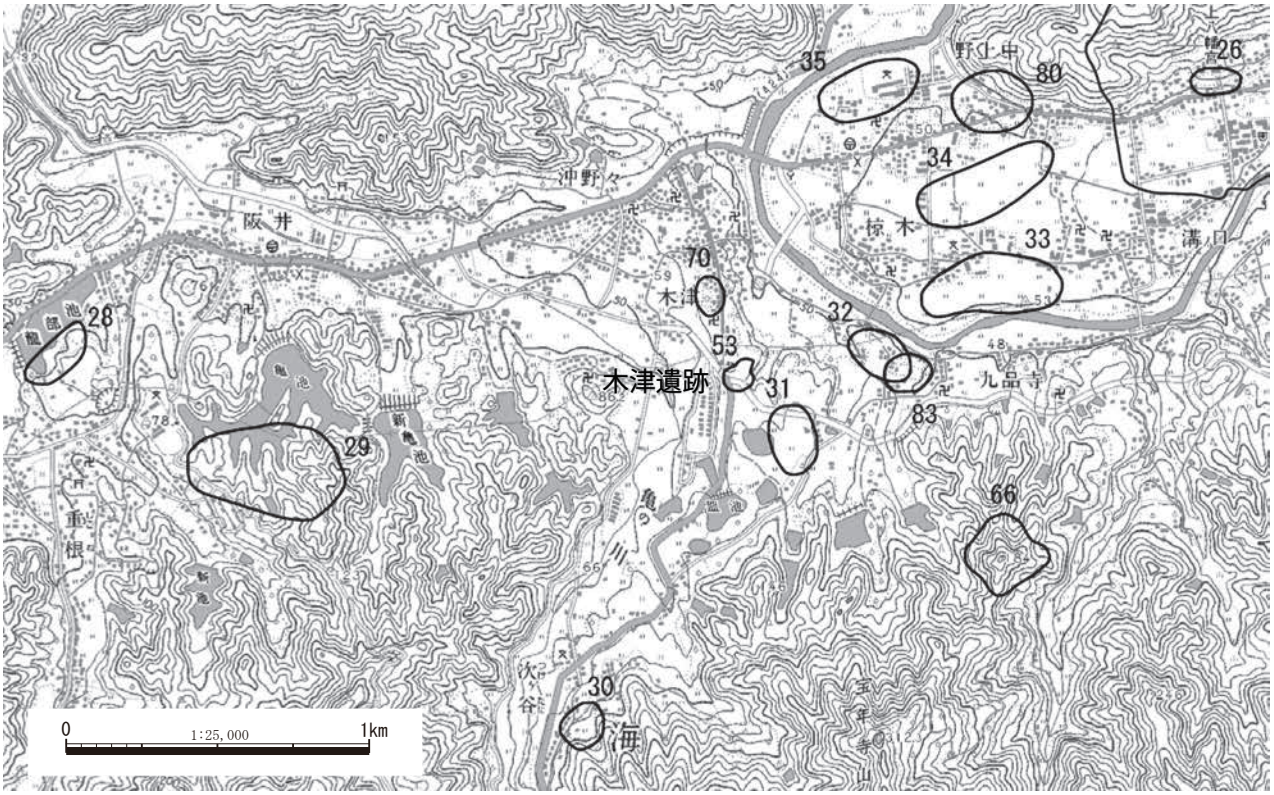


図１　木津遺跡と周辺の遺跡（1:25,000）

埋蔵文化財包蔵地　　表２　木津遺跡と周辺の遺跡地名一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	摘要
28	竜部池遺跡	阪井	散布地	縄文	池畔	石鏃、サヌカイト
29	亀池遺跡	阪井	散布地	縄文	池畔	石鏃、石匙
30	次ヶ谷遺跡	次ヶ谷	散布地	縄文	山麓	縄文土器、石器（晩期）
31	西尾崎遺跡	九品寺	散布地	縄文	丘陵端	石鏃、サヌカイト
32	西尾崎東遺跡	九品寺	散布地	縄文	河岸段丘	石鏃、サヌカイト
33	溝ノ口遺跡	溝ノ口	集落跡	縄文・古墳・中世	河岸段丘	竪穴建物跡、甕棺墓、縄文土器、石器、弥生土器
34	野上中南遺跡	野上中	集落跡	弥生・中世	台地	竪穴建物跡（円・方）、弥生土器、サヌカイト片、須恵器、石鏃
35	野上中遺跡	野上中	散布地	弥生～古墳	丘陵端	
53	木津遺跡	木津	寺院跡	室町	台地	瓦
66	九品寺城跡	九品寺	城館跡	中世	山頂	空堀、郭
70	岡殿屋敷跡	沖野々	城館跡	中世	丘陵頂	
80	中殿土居跡	野上中	城館跡	中世	丘陵端	
83	土居跡	九品寺	城館跡	中世	丘陵端	

第Ⅲ章　発掘調査の方法と資料整理

調査は、原則的に財団法人和歌山県文化財センターの定めた「発掘調査マニュアル (基礎編)」(2006 年 4 月) を基準として作業を進めた。発掘調査で使用した調査コードは、14-02･053 である。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用い整理・管理を行う。

第 1 節　調査現場の記録作業

木津遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業を行った。

1　写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、35mm 判（白黒・カラーリバーサル）、6 × 7 判（白黒・カラーリバーサル）、4 × 5 判（白黒・カラーリバーサル）の各フィルムを使用し、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、1200 万画素相当のデジタルカメラを補助的に使用した。撮影内容は、写真台帳に調査区・対象・撮影方向・使用フィルムを登録しているほか、デジタル画像データにも内容をファイル名に記載して保存している。

2　実測図作成作業

記録保存としての実測図作成作業は、遺構面の検出遺構の遺構位置全体図（S = 1/100）、個別遺構の平面実測図（S=1/20）・個別遺構や遺物の出土状況図（S=1/10、または 1/20）・個別遺構の断面土層図（S=1/20）を作成した。また、調査地区の壁面に対しての断面土層図（S = 1/20）を作成した。

3　航空写真撮影・基準点測量

調査地の遺構図面作成や遺物の取上げなどのため、国土座標第Ⅵ系（世界測地系）により既設の公共基準点を利用して 3 級基準点・補助点を設置し、各地区内に 4 級基準点を設置した。併せて 4 級基準点にも水準測量を行っている。

発掘調査により検出した遺構は、ラジコンヘリコプターを使用した調査区全体の航空写真撮影及び航空写真測量による図化（S=1/50・1/100）を行った。

第 2 節　出土遺物等資料の整理

1　出土遺物応急整理

出土遺物については、調査現場の監督員詰所において、一部について応急的な洗浄作業を実施した。目的は、調査の進捗に伴い、現地調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていくため、また、現地説明会において公開するためである。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までのコンテナ収納・管理を目的とした遺物登録台帳の作成作業を行った。

2　出土遺物等整理業務

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、現地調査の遺構図面・遺構写真等の調査記録資料の整理を行い、資料登録台帳（データの PC 入力）等を作成した。

出土遺物の内、土器、瓦類は、通常の遺物コンテナ（容量 28ℓ）にして 45 箱である。その他、金属製品 2 点、石製品 1 点、石 3 点である。出土遺物の整理は、調査同様に「発掘調査マニュアル（基礎編）」（2006 年 4 月）に準拠して行った。

出土遺物は、応急整理済み（全ての洗浄）の後、遺物への調査コードと出土遺物登録番号の注記作業（写真 4）・遺物内容及び点数の台帳登録・接合作業を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物実測図の作成（写真 5）・遺物実測図のトレース・トレース図のレイアウト・遺物実測図の整理、集計登録データ等入力を行った。

現地調査の遺構図面は、台帳登録・報告書掲載用図面の作図を行い、調査報告書に掲載する図面原稿の抽出を行った。抽出した遺構図面についてトレース作業・レイアウト作業を行った。また、調査報告書の本文原稿作成に必要なため「検出遺構規模一覧」を作成し、PC へのデータ入力作業を行った。

調査現場の記録写真には、前述の写真の他、ラジコンヘリコプターを使用した航空写真がある。デジタル写真画像を省く各写真は、写真アルバムに収納し、各写真アルバムの背表紙にタイトルを明示した。デジタル写真画像は調査時に地区毎にフォルダに収められている。

デジタル写真画像・航空写真を省く写真に対して写真登録番号を付し、航空写真を省く写真に対して写真内容の記録を記載した（写真 6）。一部のデジタル写真画像については、調査報告書に使用する目的で、掲載用の写真画像の抽出を行った。

出土遺物の内容登録に伴う遺物破片点数の数量化は、およその時代と主要となる土器類・その他の遺物に分けて作

写真 4　遺物への注記作業

写真 5　遺物実測作業

写真 6　写真整理作業

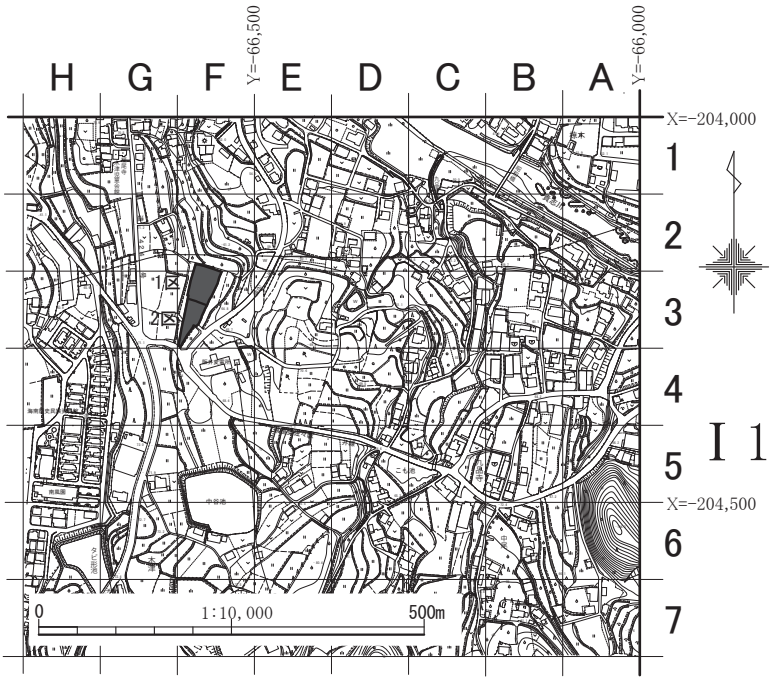


図 2　調査位置と区画割（100m 区画）

業を進めた。土器の種類は、矛盾のない程度に簡素化している。時代・時期区分については、およその時代設定を行い、大きく弥生時代中期、弥生後期・終末期、古墳時代、飛鳥・奈良・平安時代、平安末期・鎌倉・室町時代、江戸時代に区分した。

3　調査区の設定

地区割の方法

調査現場での実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割の基準点は平面直角座標系（世界測地系）第Ⅵ系の座標軸を使用し、数値はｍ単位で表示している。遺構図面の方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を使用した。

地区割については、原点をX=－204,000m、Y＝－66,000mに基点を設け、この基点から西方と南方にそれぞれ1km四方の区画を1単位として大区画を設定した。基点から西方向にはローマ数字で、南方向にはアラビア数字で表記した。これにより今回の調査範囲は大区画Ⅰ1区に位置することとなる。この基点から100m四方の区画を1単位とした中区画を設定し、北東端を基点として西方向にA~Jと南方向に1~10と表記した（図2）。

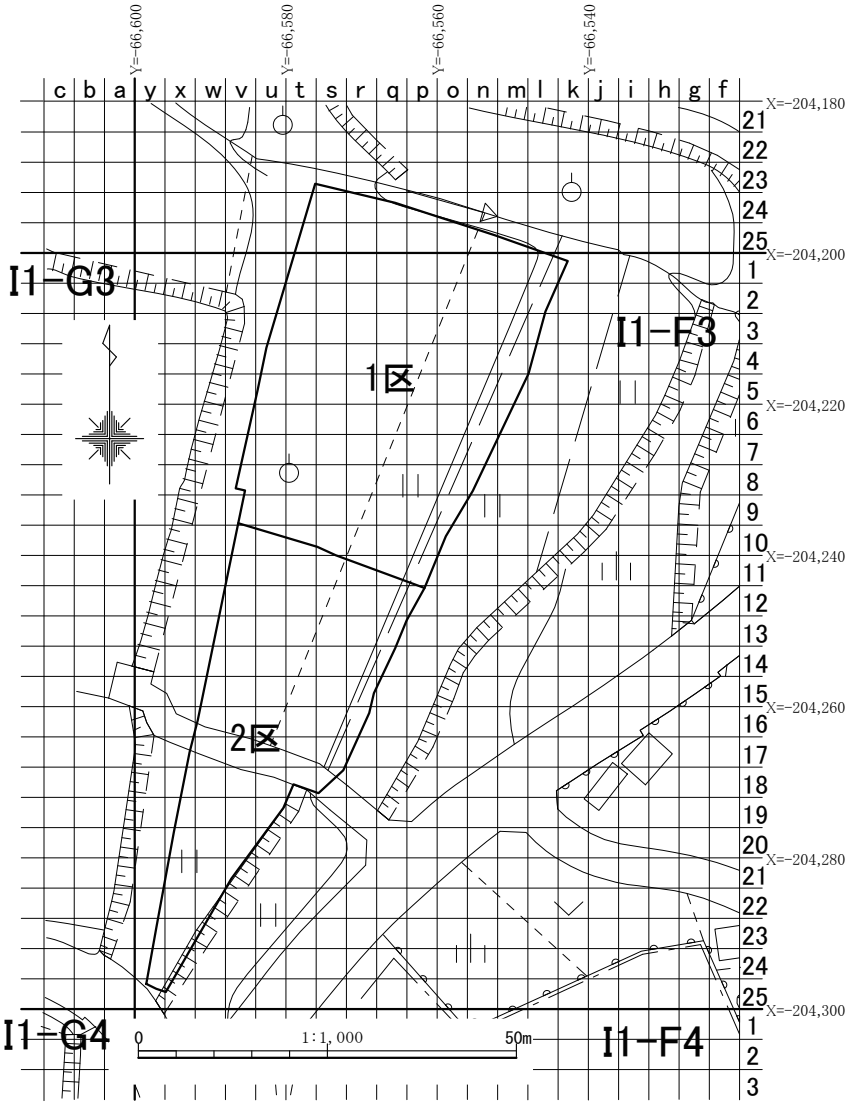


図3　調査範囲と区画割（4m区画）

さらに4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を基点として西方向にa~y、南方向に1~25と表記した（図3）。

遺構図面作成や遺物取り上げの際には原則として、4m四方の小区画で行い、大区画－中区画－小区画を組合わせて表記した。（但し、今回の調査範囲はすべて大区画Ⅰ1区に入るため、大区画の表記は省略した。）

調査区は、排土置き場を確保する必要から1区と2区の2区画に区分した。

第Ⅳ章　調査成果

第１節　調査の成果

1　調査の概要

西側中央部北寄りのやや盛り上がった平坦部分は、旧地形で最も標高が高かったと考えられる。

遺構検出面直上まで表土があり、畑地造成のための削平を受けているとみられる。その南側は第３層の堆積が確認された。北端部にも第３層を検出したが、北に向かって下る傾斜になっており、この範囲に土砂を搬入して平坦地化し、段をなし耕作地として造成したようである。又、コンクリート擁壁に沿って設けられた水路より東側では第５層以下まで削平を受けて基盤層に含まれている礫が露出しており、遺物の密度も低い。東側中央部で、扇形に第３層の堆積が確認された。

西側の中央部周辺で遺構密度が高く、それを取り巻く部分の遺構密度は低い。地山は鉄分を多量に含むとみられ、赤色をなす。

2　基本層序と遺構面

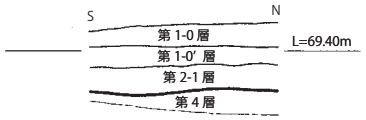
調査前の現況は水田、畑地である。

基本層序

第１層：現在の水田耕作土である。暗褐黄もしくは黄褐灰シルトに細分できる。

第２層：近世の水田耕作土とみられ、近世の遺物を含む。

第３層：灰黄褐、黄褐シルトで中世の遺物を含む遺物包含層であり、第４～６層（基盤層）上に堆積する。第３層直下となる遺構面は表面が硬化している場所が多く認められた。調査区内では後世の農地造成等により大きく削平を受けているが、第３層が堆積する範囲内で検出された遺構については、削平を受けている可能性が極めて低いといえる。



西壁土層

第１―０層　2.5Y4/2 暗灰黄シルト、表土
第１―０′層　2.5Y5/3 黄褐シルト、表土
第２―１層　2.5Y3/1 黒褐シルト、2.5Y5/4 黄褐シルト少量含む
　φ 5mm ～ 2cm の礫少量含む
第４層　10YR5/6 黄褐シルト

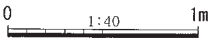
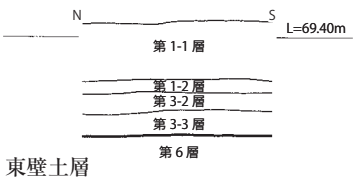


図４　基本層序１（調査区西壁土層：F3－u3）



東壁土層

第１―１層　10YR3/3 暗褐シルト、粗砂を少量含む
第１―２層　10YR4/2 灰黄褐シルト、粗砂を少量含む
第３―２層　10YR5/6 黄褐粗砂
　細礫を主体としφ 5 ～ 20mm の礫を多量に含む
　また、φ 30mm ～ 50mm の礫をわずかに含む
第３―３層　10YR5/6 黄褐シルト＋粗砂、φ 5 ～ 20mm の礫をやや多量に含む層位上辺にマンガン粒顕着
第６層　10YR5/8 黄褐シルト、粗砂φ 2 ～ 10cm の礫を少量含む

図５　基本層序２（調査区東壁土層：F3－w22）

基盤層

第４層：10YR5/6 黄褐シルトである。

第５層：2.5Y6/6 明黄褐シルトで鉄分の沈着が粒状に見られる。

第６層：10YR5/8 黄褐シルト、粗砂φ 2 ～ 10cm の礫を少量含む。

3　遺構検出面

遺物包含層第３層直下は第４層（基盤層）であるが、後世における削平が第５層、第６層にまで及ぶ箇所では遺構検出はそれぞれ第５層、第６層上面で実施した。

なお、遺構検出面上の堆積状況から、遺構検出面は主に次の３つに分けられる。

１．直上に第３層が堆積する、旧地形が残存する部分。

２．直上に第２層が堆積する、畑地造成により盛土がなされた部分。

３．直上に第１層（現代の水田耕作土）が堆積する、または撹乱が遺構検出面まで及ぶ、畑地造成により削平、平坦地化された部分。

第２節　各遺構

以下、主な遺構について記述する。

２溝（図６、写真図版３）

調査区南半で検出し、幅2.4m、深さ約0.3mの溝状遺構で断面形状は中央が段をなして窪む。東西に延び、11.0mを検出した。青磁碗を含む土器75点（16・18・23・33・34・36・37）、瓦は、軒丸瓦、軒平瓦を含む484点（41・44・46・47・52・53・62）、不明品10点が出土した。

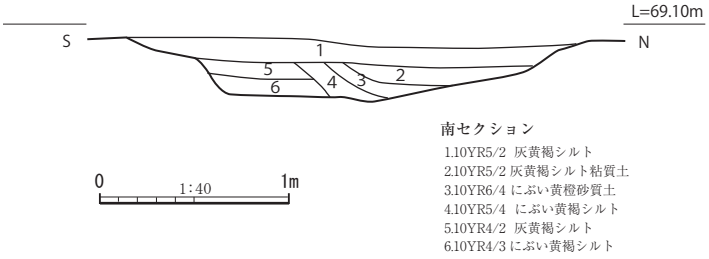


図６　２溝断面土層図

４石組遺構（図９、写真図版３）

東西6.5m×南北2.7m以上の西側が隅丸をなす平面形状が長方形の土坑である。遺構内には１辺約30cmの自然石及び割り石を２列に据えた部分があり、それらの石の間隙を水路としたものと考えられる。石列の一部（東側）は、攪乱を受け、本来の位置から移動しているものと判断される。南側の礫は意図的に詰められたものか、または敷かれたものと判断され、２段の平坦面をなす。石材のほとんどが石英岩で貴志川からの白色の石を選択的に採取したものとみられる。土師器11点、瓦器４点、須恵質土器１点、須恵器１点、陶器９点（26･32･35）丸瓦23点（54）、平瓦113点が出土した。

12土坑（写真図版３）

幅1.8m、深さ0.06m程度の東側を現地形の畑の段差に削られた不定形の土坑である。長さは11.0mを測る。土師器８点（７）が出土している。

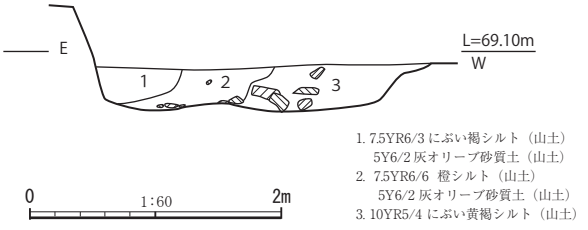


図７　18落ち込み状遺構断面土層図

18落ち込み状遺構（図９、写真図版４）

最大幅2.7m、深さ0.4m、延長15.0mにわたって検出された。埋土は３層に分かれ、いずれの層も片岩礫を多量に含み、整地土であるとみられる。上面に板石３枚が揃え並べられた状態で検出された。これらの板石は上面となっている部分のみ磨滅が著しく、踏み石等の用途が推定される。土師器１点（5）、瓦器５点、軒平瓦１点（45）、丸瓦９点（55）、平瓦65点（63・64）が出土した。

34 土坑（写真図版 4）

長径 1.8m、短径 1.3m を測る隅丸方形の遺構で、深さ 0.3m を測る。断面形状は浅い U 字形で 3 層をなす。土師器 7 点（11）、瓦器 11 点、丸瓦 1 点が出土した。

36 土坑（写真図版 4）

掘形の径が、約 0.3m の土坑で埋土から軒丸瓦 1 点（42）が出土した。直上に 7 溝がある。

43 通路状遺構（図 11、写真図版 4・5）

幅 2.2m、深さ約 0.3m の東西方向に延びる遺構で、延長 3.5m を測る。南北に幅約 0.3m の側溝とみられる遺構を有する。幅約 1.5m の凹面をなし、その東側では硬化面が検出された。基盤層中の礫は硬化面上にいて表面が摩滅し、側溝とみられる遺構はいずれも、底部の泥土状となった炭化物の他、焼土塊、瓦片や礫が埋土と共に堆積していた。また、硬化面上において土師器 7 点（4・6・17）、瓦器 10 点、土釜 2 点、丸瓦 25 点（58・59）、平瓦 59 点が出土した。

50 溝（図 10、写真図版 6）

幅 2.4m、延長約 8.5m の南北に延びる深さ約 0.2m の溝状遺構である。断面形状はごく浅い U 字形で中央部分が凹んでいる。埋土から土師器 4 点、瓦器片 16 点、陶器 1 点他、多量の瓦（48 ～ 50・56・57・60・61）が出土した。

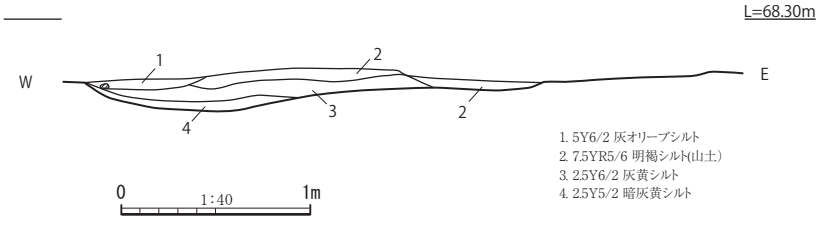


図 8　50 溝断面土層図

71 溝（写真図版 6）

最大幅 2.2m、延長約 10.0m の溝で深さは約 0.24m で浅い U 字形である。土師器は、皿 1 個体（3）を含む 25 点、瓦器 12 点、土師質羽釜 4 点（19）、東播系須恵質捏鉢 2 点、陶器 2 点、丸瓦 2 点、平瓦 12 点が出土している。

81 土坑（写真図版 6）

長径 1.0m、短径 0.5m の隅丸方形をなし、深さ 0.4m を測る土坑である。土師器 9 点（9）、瓦器 3 点が出土している。上層、下層に分かれ、上下層とも 2 つに分層される。

85 小穴（写真図版 6）

直径 0.3m の円形をなし、深さ 0.06m を測る小穴である。瓦器椀 7 点（一個体）（13）が出土している。

133 土坑（写真図版 6）

長径 1.0m、短径 0.7m の隅丸方形をなし、深さ 0.2m の土坑である。断面形状は東側でごく浅く、西側で段状に窪む。遺物は古瀬戸とみられる平碗（28）と東播系須恵質捏鉢（20）が出土している。

189　柱穴（写真図版 7）

直径 0.5m の円形をなす柱穴である。深さ 0.5m を測る。遺物は瓦質土器の甕 2 点（24）が出土している。

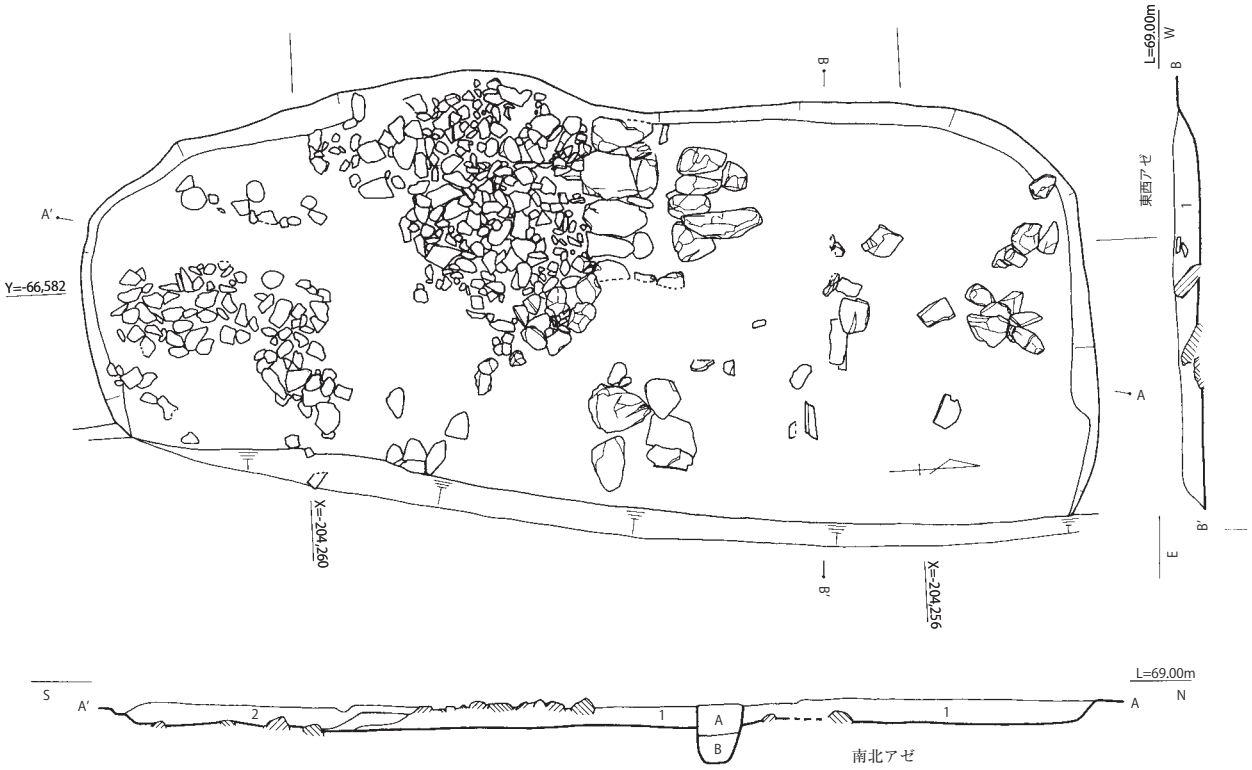


図 9　4 石組遺構出土状況図・断面土層図

南北アゼ

1. 10YR4/2 灰黄褐シルト、7.5YR5/6 明褐（山土）シルト、ブロック状に入る
炭、焼土粒（7.5YR3/2 黒褐・5YR4/6 赤褐φ0.5 ～ 2cm 大）中量含む
2. 7.5YR6/6 橙（山土）シルト、2.5Y6/2 灰黄シルト　混層
炭、焼土粒極少量含む
A　10YR5/1 褐灰シルト、炭、焼土粒含む
B　2.5Y6/2 灰黄シルト

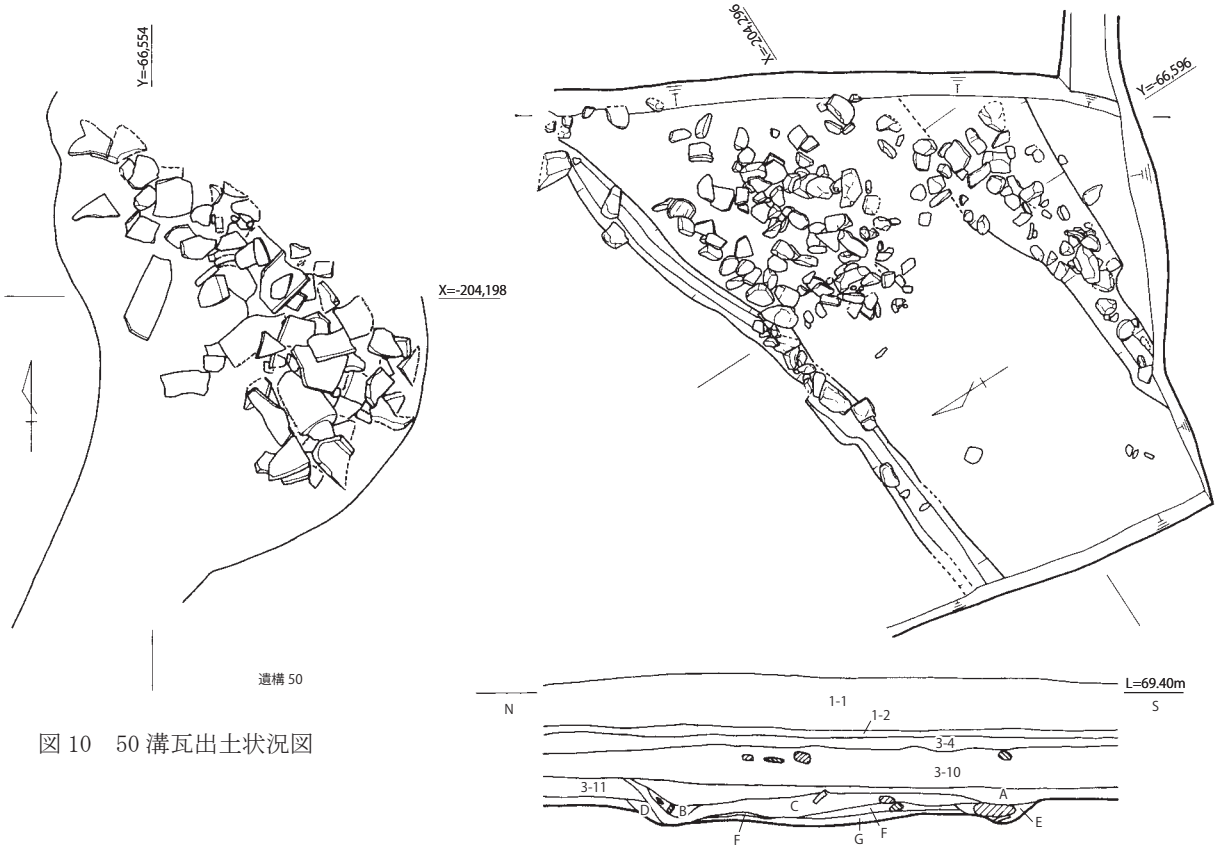


図 10　50 溝瓦出土状況図

0　1：50　2m

第 1—1 層　10YR3/3 黄褐シルト、粗砂を少量含む
第 1—2 層　10YR4/2 灰黄褐シルト、粗砂を少量含む
第 3—4 層　2.5Y5/6 黄褐粗砂＋シルトφ5 ～ 15cm の礫をわずかに含む
φ5 ～ 10mm の礫を多量に含む、マンガン粒少量認められる
第 3-10 層　10YR5/6 黄褐シルト、φ5 ～ 10mm の礫をわずかに含む
φ20cm 程度の河原石をわずかに含む
第 3-11 層　10YR5/6 黄褐シルト、3-10 層に似るが、より色調暗く
河原石を含まない

A　2.5Y6/8 明黄褐シルト、炭化物わずかに含む
B　2.5Y6/8 明黄褐シルト、第 1 層より色調わずかに明るい　φ5 ～ 12cm の礫を少量含む
C. 10YR5/6 黄褐シルト　φ3 ～ 15cm の礫をわずかに含む　瓦を多量に含む箇所が部分的にみられる
D. 2.5Y5/3 黄褐シルト　φ3 ～ 5mm の礫を少量含む　マンガン粒著しい
E. 10YR5/3 にぶい黄褐シルト　φ5 ～ 30cm の礫を多量に含む　マンガン粒著しい
F. 2.5Y6/4 にぶい黄シルト　φ1cm 程度の礫を少量含む
G. 10YR5/4 にぶい黄褐シルト　φ5 ～ 15mm の礫（片岩礫多い）を多量に含む
φ7 ～ 15cm の礫をわずかに含む

図 11　43 通路状遺構出土状況図・断面土層図

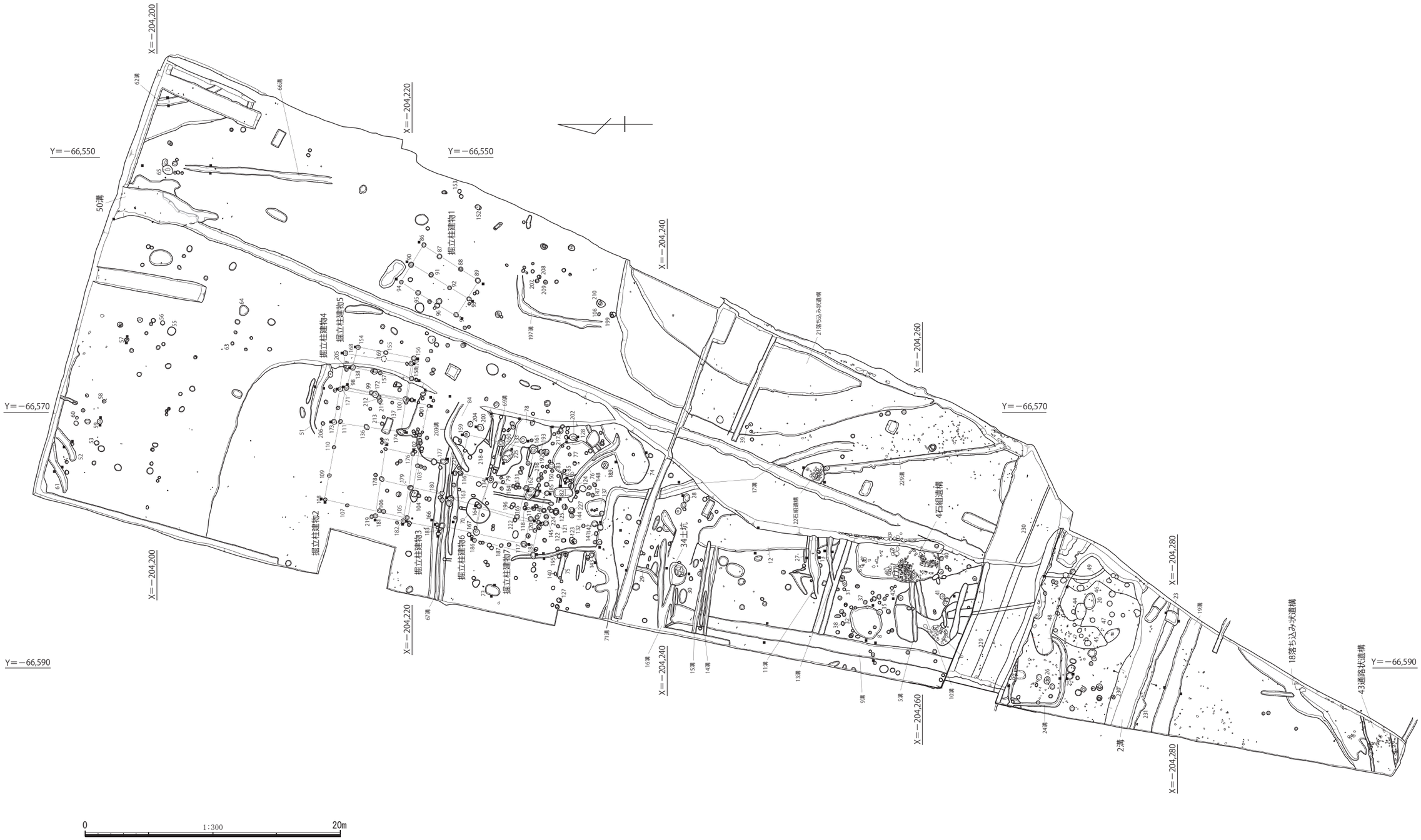

X=−204,200
X=−204,220
X=−204,240
X=−204,260
X=−204,280
Y=−66,550
Y=−66,570
Y=−66,590
50溝
62溝
66溝
掘立柱建物1
掘立柱建物2
掘立柱建物3
掘立柱建物4
掘立柱建物5
掘立柱建物6
掘立柱建物7
34土坑
4石組遺構
18落ち込み状遺構
43通路状遺構
0
1:300
20m

図 12　遺構全体平面図

第 3 節　掘立柱建物跡

掘立柱建物 2
（図 13、写真図版 7）

掘立柱建物 2 は、調査区北西より F3－s5 付近を中心に位置し、桁行東－西 4 間（8.80～8.88m）、梁行北－南 3 間（6.64 ～ 6.72m）の側柱建物である。建物の桁行主軸は N－79°－W の振れとなる。柱の掘形は 0.2~0.5m を測る。101 柱穴は、削平を受けていると考えられ、104 柱穴は、掘立柱建物 2 の他の柱穴の埋土と異なる埋土である。また、98 柱穴は掘立柱建物 5 と、100 柱穴は掘立柱建物 4・5 と重複するが、埋土は掘立柱建物 5 のものである。桁行方向の柱間は約 1.92 ～ 2.72m、梁行方向の柱間は 1.76 ～ 2.56m である。遺物は出土していないため、明確な時期決定は困難である。埋土から、掘立柱建物 5 より以前に存在したと考えられる。

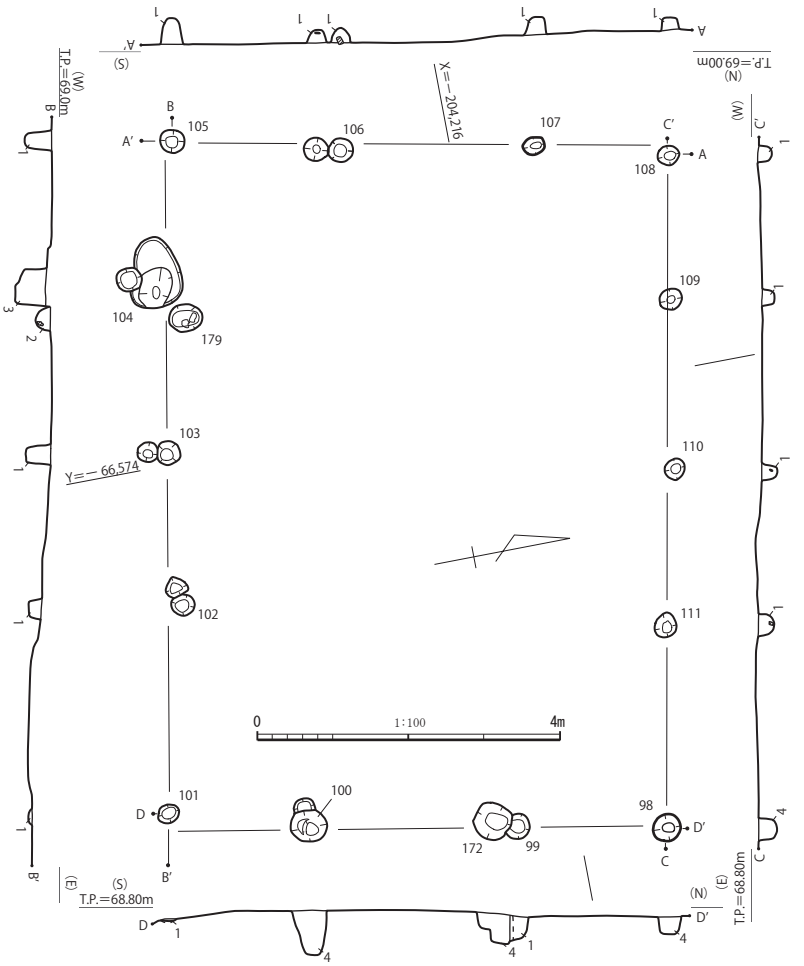


図 13　掘立柱建物 2 実測図

1　5Y5/2　灰オリーブシルト
2　10YR5/1　褐灰シルト
3　2.5Y5/2　暗灰黄シルト
4　10YR5/2　灰黄褐シルト

掘立柱建物 3（図 14、写真図版 7）

掘立柱建物 3 は、調査区北西より、F3 － t5 付近を中心に位置し、桁行北－南 2 間（5.28 ～ 5.44m）、梁行東－西 2 間（4.64 ～ 5.28m）の総柱建物である。建物の桁行主軸は、N－15°－E の振れとなる。掘形は 0.2~0.34m を測り、円形を呈する。桁行方向の柱間は、2.32 ～ 2.88m、梁行方向の柱間は、2.24 ～ 2.88m である。遺物は瓦器椀の口縁が 1 点出土

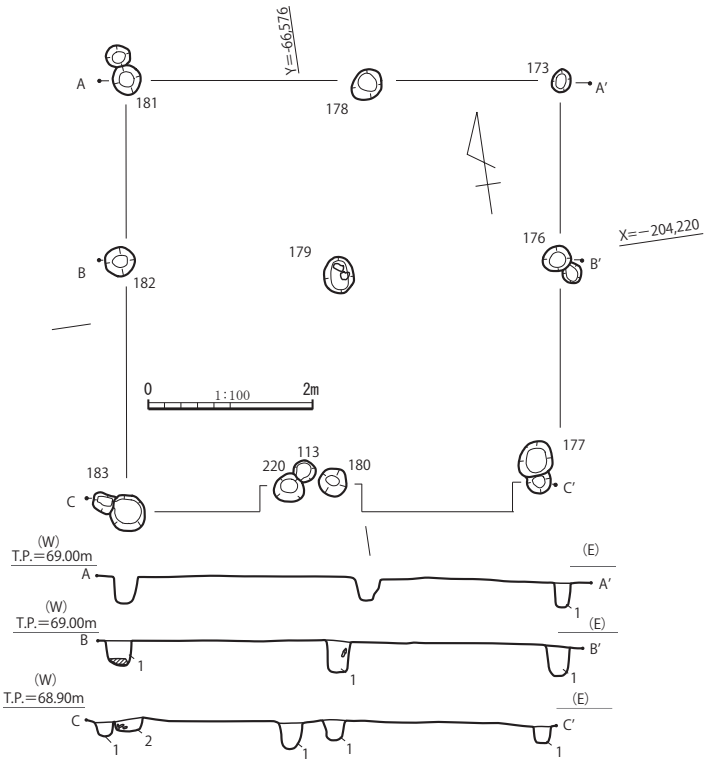


図 14　掘立柱建物 3 実測図

1　10YR5/1　褐灰シルト
2　10YR4/2　灰黄褐シルト炭・焼土中量含む

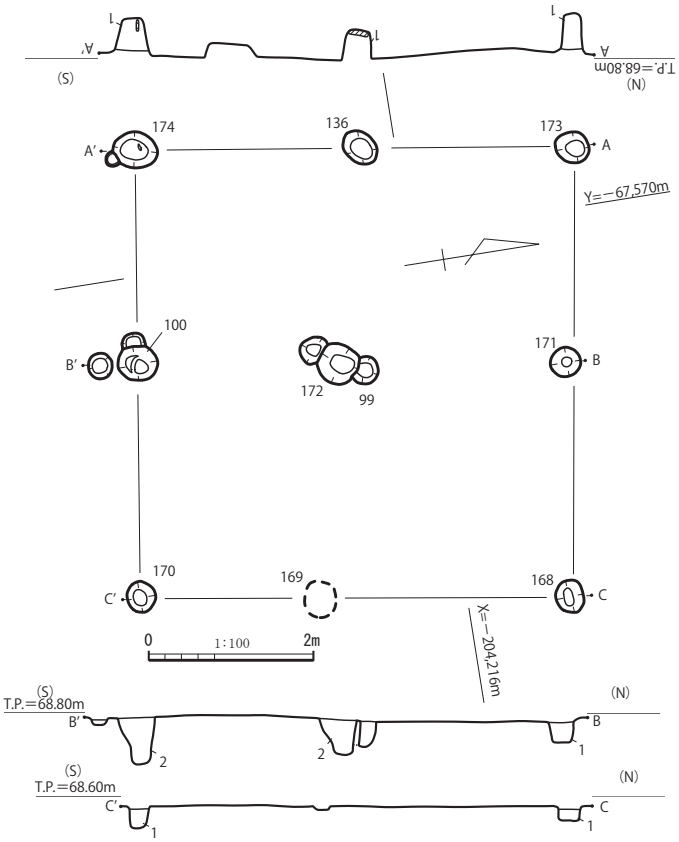
していることから、14 世紀前半までに帰属する遺構と考えられる。北側が掘立柱建物 2 の敷地と重複する。

掘立柱建物 4（図 15、写真図版 7）

掘立柱建物 4 は、調査区北西より F3 － r5 付近を中心に位置し、桁行西－東 2 間（5.44 ～ 5.52m）、梁行北－南 2 間（5.2 ～ 5.44m）の総柱建物である。建物の桁行主軸は、N－81°－W の振れとなる。掘形は 0.28~0.5m を測り、歪な円形を呈する。

172 柱穴は、掘立柱建物 5 と重複し、その埋土は掘立柱建物 5 の埋土と同じである。桁行方向の柱間は、2.56 ～ 2.88m、梁行方向の柱間は、2.16 ～ 2.88m である。西側が掘立柱建物 2 と、また全体が掘立柱建物 5 の敷地と重複する。100 柱穴は掘立柱建物 2・5 と、柱穴 172 は掘立柱建物 5 と重複するが、いずれも埋土は掘立柱建物 5 の他の柱穴と同じ埋土である。

遺物は縄文晩期の深鉢 1 点、土師器小皿（10）を含む 16 点、瓦器 2 点が出土した。

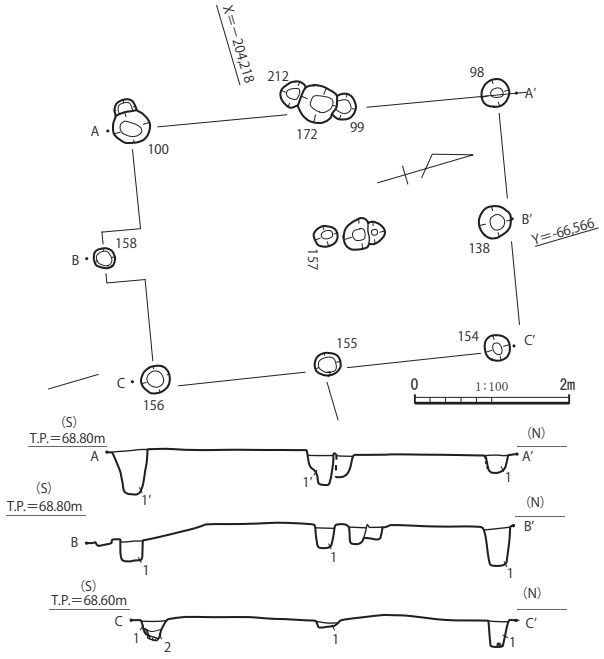


1　10YR4/3 にぶい黄褐シルト
2　10YR5/2 灰黄褐シルトに
7.5YR5/4 にぶい褐シルト（山土）が混じる

図 15　掘立柱建物 4 実測図

掘立柱建物 5（図 16、写真図版 7）

掘立柱建物 5 は、調査区北西より F3 － r5 付近を中心に位置し、梁行西－東 2 間（約 3.36m）、梁行北－南 2 間（4.5 ～ 5.2m）の総柱建物である。建物の桁行主軸は、N－16.5°－E の振れとなる。掘形は 0.28 ～ 0.5m で円形から歪な楕円形を呈する。桁行方向の柱間は、2.24 ～ 2.88m、梁行方向の柱間は、1.6 ～ 1.68m である。西側で掘立柱建物 2 と、また全体が掘立柱建物 4 と重複する。遺物は土師器小皿（8）を含み 6 点、土釜口縁 1 点、陶器 1 点、不明 1 点が出土した。



1　10YR5/2 灰黄褐シルト
1′　10YR5/2 灰黄褐シルトに
7.5YR5/4 にぶい褐シルト（山土）混じる
2　10YR5/1 褐灰粘質土

図 16　掘立柱建物 5 実測図

掘立柱建物 6（図 17、写真図版 7）

掘立柱建物 6 は、調査区北西より F3 － t7 付近を中心に位置し、桁行北～南 3 間（7.2 ～ 7.44m）、梁行東～西 2（一部 3）間（5.36 ～ 6.64m）の総柱建物であるが、南西隅が部分的に拡張する可能性がある。建物の桁行主軸は、N－15°－E の振れとなる掘形は、0.3 ～ 0.5m で円形を呈する。桁行方向の柱間、2.08 ～ 3.12m。梁行方向の柱間は 1.12 ～ 3.84m である。南西側が掘立柱建物 7 と重複する。117 柱穴等に据え石とみられる石が見られる。遺物は、土師器 11 点、瓦器 4 点、土釜 1 点、瓦質土器 1 点、備前焼の壺と甕の破片（29 ～ 31）が 17 点、磁器 1 点、他 6 点と据え石とみられる石 1 点が出土している。

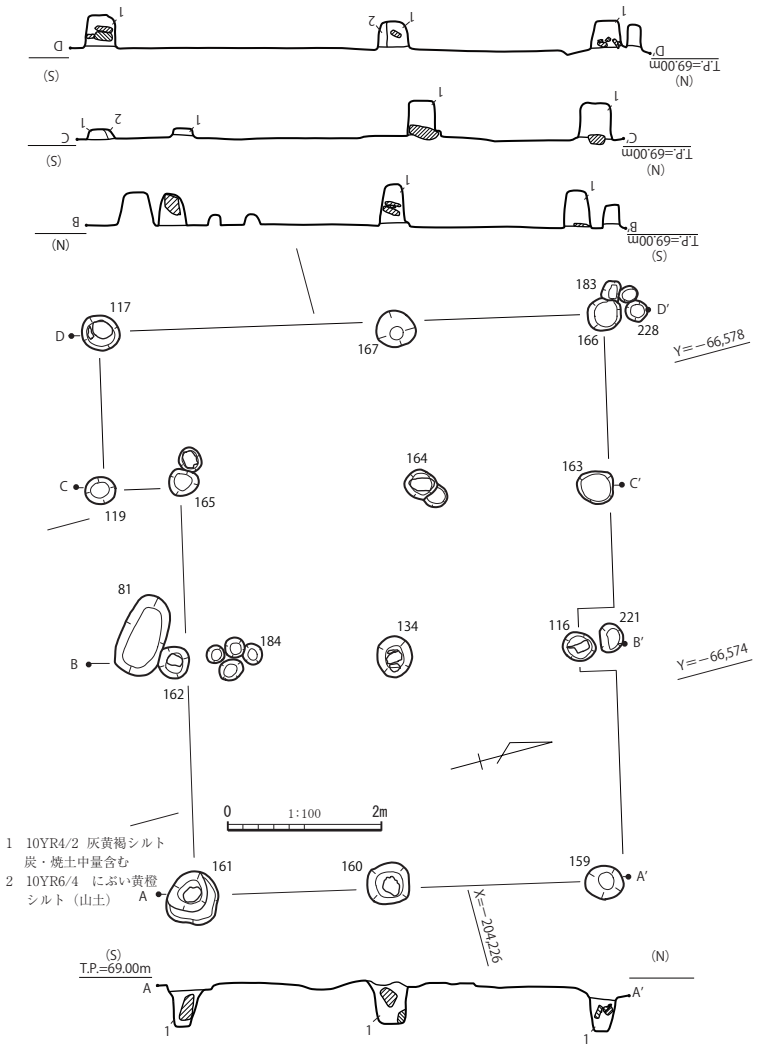


図 17　掘立柱建物 6 実測図

掘立柱建物 7
（図 18、写真図版 7）

掘立柱建物 7 は、調査区北西より F3 － r5 付近を中心に位置し、桁行西～東 2 間（4.64 ～ 4.96m、梁行北 ～ 南 2 間（4.48 ～ 4.96m）の総柱建物である。建物の桁行主軸は、N－15°－E の振れとなる。掘形は 0.28 ～ 0.5m で円形から歪な楕円形を呈する。桁行方向の柱間は、2.24 ～ 2.72m、梁行方向の柱間は 1.92 ～ 3.04m である。敷地の大部分が掘立柱建物 6 と重複し、134、164 柱穴は掘立柱建物 6 の

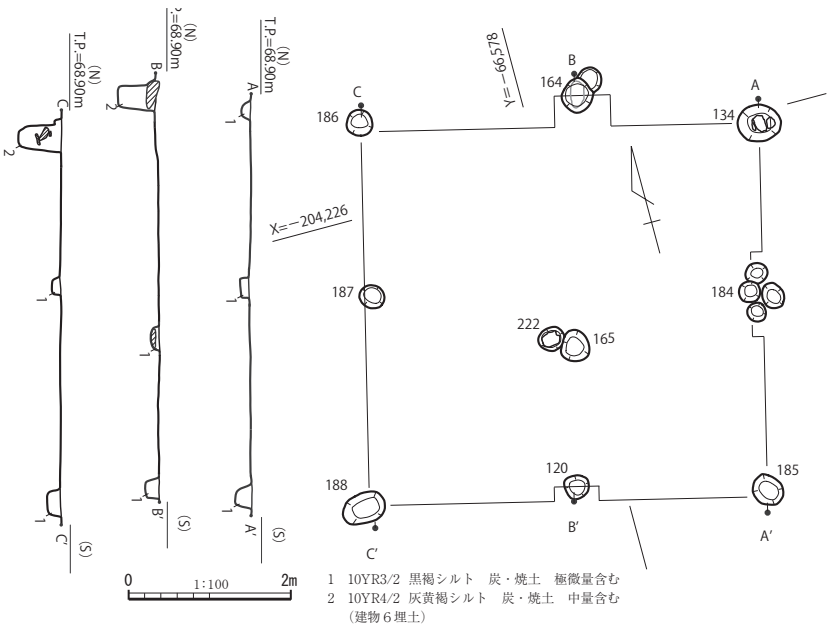


図 18　掘立柱建物 7 実測図

他の柱穴の埋土と同じであることから、掘立柱建物6以前に存在していたと考えられる。遺物は丸瓦が1点出土している。

掘立柱建物1（写真図版7） 掘立柱建物1は、調査区北F3 − p7付近に位置し、桁行北東－南西3間（5.04 ～ 5.2m）×梁行北西－南東2間（3.20 ～ 3.44m）の総柱とみられる建物である。建物の桁行主軸は、N − 33.5° − Eの振れである。柱の掘形は、0.24 ～ 0.42mを測り、円形から楕円形を呈する。すべての柱穴が、削平を受けているものと考えられる。桁行方向の柱間は約1.5 ～ 2.0m、梁行方向の柱間は約1.6 ～ 1.9mである。遺物は出土していないため、明確な時期決定は困難である。

第4節　出土遺物

1・2層（機械掘削） 43は軒平瓦である。均整唐草文様で界線はなく、瓦当は顎貼付け技法で接合されている。文様部には離れ砂が付着し、瓦当部裏面は強い横ナデを施している。51は丸瓦で凹面は玉縁部までコビキAと布目痕が残り、一部を箆状工具により調整している。側端部は幅2 ～ 3cmで箆ケズリ、玉縁部は箆ナデを施す。凸面は、本体部は縄目叩きの後、ナデ調整を施す。

3層　22は東播系須恵質捏鉢。底部に回転糸切り痕がある。15は土師質の羽釜口縁部。1・2は土師器の皿。1は直径4mmの穿孔があり、周辺に煤が付着していることから、灯明皿の可能性がある。2は口縁部が、やや外反気味。21は東播系須恵質捏鉢で重ね焼の痕が認められる。口縁部に自然釉が付着している。27は備前焼の擂鉢。また、刀子とみられる金属製品40が出土している。

2溝　16・18は土師質土釜で、いずれも頸部は、くの字に屈曲している。23は瓦質の火舎の脚部の剥離した底部と思われる。33は備前焼の甕の口縁部。玉縁に自然釉が付着している。34は備前焼の甕。36・37はいずれも龍泉窯系の青磁の碗で、36は無文直口碗で全体に貫入が認められる。37は見込に草花文を施し、高台裏まで施釉されている。41は軒丸瓦の瓦当部である。左巻きの3つ巴文で巴の尾は長く、外側の圏線がない。44は軒平瓦の瓦当部である。文様、瓦当貼付け方法とも43と同様。46・47・52・53は丸瓦。玉縁長は5 ～ 6cmで、凹面には布目痕、胴側端部には幅2.0 ～ 2.5cmの箆調整をなす。46は玉縁に幅5cmで箆ナデ痕が認められる。47は、凸面には縄目叩き痕が残る。焼きが甘く2次焼成の可能性もある。53は凹面にコビキA痕が残る。62は平瓦。頭端部に幅1.5cmの面取りを施し、両面とも板状工具によるナデ調整。離れ砂が付着している。

4石組遺構　26・32・35いずれも備前焼である。26は擂鉢の口縁部。32は須恵質焼成の甕の口縁部である。35は甕で頸部から体部にかけて自然釉が付着する。54は、丸瓦で凹面にはコビキA痕が残り、広端部から約8cmを箆状工具で強くナデ調整を施す。凸面は縄目叩きの後、ナデ調整を施す。

12土坑　7は土師器の皿。底部から体部にかけてユビオサエ＋ナデ調整を施す。口縁は外反ぎみ。

18落ち込み状遺構　5は土師器の皿。口縁部はやや内湾している。45は軒平瓦の瓦当部である。文様、瓦当貼付け方法とも43と同様。台の圧痕が残る。55は丸瓦で、全体に歪である。凹面には工具による押し痕が複数見られ、布の重なりによる深い沈線が玉縁まであり、吊り紐痕も認められる。63・64は平瓦である。いずれも両面にコビキA痕、箆ナデ調整が残り、63は両面に板状圧痕が残り、全面赤褐色を呈し、2次焼成を受けた可能性がある。64は凸面に離れ砂の付着、

製作台の板状圧痕両面に残る。

34 土坑　11 は土師器の小皿。底面は回転糸切り後、ユビオサエ＋ナデ調整を施す。

36 土坑　42 は軒丸瓦の瓦当部。左巻きの 3 つ巴文で巴の尾が長く圏線に接する。外側の圏線はない。周縁は高く、巴も丸みを帯びている。瓦当部文様に離れ砂が付着し、燻されている。

43 通路状遺構　4・6 は土師器の皿。4 は重ね焼き痕が見られる。6 は底部に板状の圧痕が残る。内面に焦げ痕が認められることから灯明皿の可能性がある。17 は土師質の羽釜。体部内面に板状工具のナデ、当て具痕、ユビオサエが認められる。58・59 は丸瓦で、玉緑長が 7cm を測る。

45 土坑　25 は備前焼の擂鉢で口縁部に自然釉が付着している。

50 溝　48・49・50・56・57 は丸瓦。いずれも凹面に布目痕、凸面の本体部は縦に篦ナデ、玉縁部は水平にナデ調整。 48 は凹面に篦状工具の当て痕が認められ、本体部の側端より幅 1.5 ～ 2cm、玉縁部は端部から幅 8cm 篦削り調整を行う。凸面に、工具の圧痕が認められる。50 は凹面に篦ケズリ痕、故意に打ち欠いたとみられる痕がある。56 は凹面に工具の当て痕が有る。玉縁長 4.5cm。57 は凹面に一部にナデ調整、側端から幅 2 ～ 3.5cm の篦ケズリ。また、玉縁は篦ケズリにより面取りを施す。60・61 は平瓦である。60 は凹面に工具の当て痕が認められ、凸面は篦ナデ調整を施す。また、両面に板の圧痕、離れ砂が認められる。

71 溝　19 は土師質の羽釜の口縁部である。鍔は貼付けで口縁端部は内側に折り返している。外面に煤が付着する。3 は土師器の皿で、外面底部に板状圧痕が認められる。

81 土坑　9 は土師器の小皿で口縁がやや外反し、歪である。底部はユビオサエで整形を施す。

85 小穴　13 は瓦器椀。全体的に歪で口縁部は歪んだ楕円形をなす。高台は退化しているが、ユビオサエにより高台の体をなす。内面は磨滅が著しく調整不明瞭。

133 土坑　28 は古瀬戸とみられる平碗。口縁部から体部中程まで灰釉を施す。口縁部に釉がかからない箇所が認められる。20 は東播系須恵質捏鉢である。重ね焼痕が認められ、口縁部にのみ自然釉が付着する。

134 柱穴　29･30 は備前焼と思われる壺。29 は外面に自然釉が付着し、肩部に櫛目を施している。30 は板状工具によるナデを施し、内面には自然釉が残る。一個体の可能性がある。

138 柱穴　8 は土師器の小皿。底面は糸切りのようであるが、磨滅により不明瞭。体部から口縁部に回転ナデを施す。

139 土坑　12 は瓦器椀。内面は磨滅が著しく、調整不明瞭。口縁部はヨコナデにより段をなし、やや外反する。高台は貼付け高台であるが、退化し、途切れる箇所が認められる。

150 小穴　14 は瓦器椀の口縁から底部とみられる。摩耗のため灰色を呈する。

166 柱穴　31 は備前焼の四耳壷とみられる。内面には耳を接着時のユビオサエ痕、表面には自然釉が残る。

171 柱穴　10 は土師器の小皿である。底面は回転糸切りの体をなすが､磨滅により不明瞭である。

189 柱穴　24 は瓦質土器の壺で口縁部はヨコナデ、頸部は幅 0.15cm のやや粗い篦磨きを施す。

小結

縄文時代の凹基式石鏃が、基盤層直上で出土し、同じく縄文時代晩期の突帯文系土器深鉢の口縁部が 173 柱穴の埋土より出土している。木津遺跡の北に西尾崎遺跡､東に西尾崎東遺跡があり、いずれも縄文時代の遺跡と認識されており、これらの遺跡との関係があるものと思われる。

3層より下層で、瓦器椀の破片が多数出土し1・2層からも出土している、大部分は細片で磨滅しているため、時期判定には至らなかった。その中で、12～14は13～14世紀前半と考えられる。備前焼の甕、擂鉢、壺などが出土している。13世紀後半～15世紀に及ぶ幅広い時期の遺物が出土している。青磁や東播系の須恵質土器についても概ね上記の時期に合致している。

出土している3点の軒平瓦43～45は、北山廃寺の出土瓦と酷似していることから13～14世紀のものとしてよいだろう。北山廃寺の出土瓦からこの瓦の全幅は約22cmと考えられる。33土坑から出土した平瓦の全幅は約24cmであり、2点の軒丸瓦41・42についても周縁の高さや、文様から軒平瓦と同様の時期と考えられる。出土している瓦は、ほぼ2つの時期のもので構成されている。1つは軒平瓦、軒丸瓦と同時期の13世紀中頃～14世紀初頭のもので、平瓦の全幅が24cm前後で焼きが甘く、広端部の面取りがなされていない。丸瓦は凹面の箆ナデ調整の幅が広いもの、玉縁の長さが7cmを測るものが、これにあたる。

上記の瓦よりも小型でよく焼きしめられている平瓦、丸瓦が出土している。平瓦は幅が約22cm、全長は約28cmと推測され、広端部に幅1.5cm程度の面取りが認められる。また、両面に離れ砂の付着が認められ、板目の圧痕が残されている。丸瓦は、胴部径12cmのものが大半で、玉縁には勾配があり、長さが5cm前後のものである。凹面の胴側端部に幅2～3cmで箆ケズリを施している。凸面は箆ケズリによる調整が顕著に認められる。室町時代前期、14世紀中～末頃のものと考えられる。

第Ⅴ章　まとめ

今回の木津遺跡の調査では、廃棄されたとみられる大量の瓦の出土により、瓦葺き建物がある可能性を示唆されたが、調査の範囲内には瓦葺きの建物の痕跡は認められなかった。

出土した瓦は、大まかに13世紀中頃～14世紀初頭のものと、14世紀中～末頃のもので比較的小ぶりなものに大別され、少なくとも2つの時期において、性格の違う建物が建っていたと考えられる。土器に関しては13～15世紀のものが出土している。7棟確認できた掘立柱建物跡は、今回未確認の瓦葺きの建物に付随するものと考えられる。掘立柱建物(以下、建物)の主軸方向は建物1を除いてほぼ同じである。敷地が重複関係にある建物2・3・4・5は柱穴の埋土や出土遺物の関係から建物5が最も新しく、建物3と4は同時期に存在した可能性がある。双方とも出土遺物から14世紀前半までに帰属すると考えられる。建物2は時期不明である。また、掘立柱建物6･7は柱穴の埋土から建物6が新しい。建物6の埋土から、15世紀の遺物が出土しており、焼けた壁土や炭が出土していることから、この時期に火災があった可能性もある。

これらのことより、最初に建てられた掘立柱建物は、遅くとも13世紀の前半には存在していたものと考えられる。2～3回の建て替えを経て､15世紀以降に廃絶に至ったものと考えられる。おそらくは調査区より南西方向、舌状に広がる丘陵の標高の高い位置にあったと考えられる遺跡の中心部から出た不用となった瓦、土器などを低地方向に廃棄し、後世に造成をなしたのであろう。調査区南端にて確認された43通路状遺構はその向きが北東～南西方向を向いており、このことも南西方向に遺跡が広がる可能性を示唆するものであろう。

出土遺物観察表

数値の（ ）付は、残存値を示す。

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号層位	遺物種類	器種	法量 長さ（cm）口径（cm）	法量 幅（cm）器高（cm）	法量 厚さ（cm）最大径（cm）	法量 底径（cm）	石材	備考
1	図 19	8	40	312	1 区 F3-q10	3 層	—	土師器	皿	(11.3)	2.2	—	(7.0)	—	口縁～体部にかけてヨコナデを２段施す。端部はヨコナデによりやや肉厚で内反する。Φ 4cm の穿孔がある。灯明皿の可能性あり。磨滅のため調整不明瞭。反転復元。
2	図 19	8	43	275	1 区 F3-s9	3-1 層	—	土師器	皿	(12.0)	2.6	—	(8.1)	—	底部～体部にかけてユビオサエ＋ナデ、口縁にかけてはヨコナデによりやや外反。反転復元。
3	図 19	8	53	377	1 区 F3-v9	—	71	土師器	皿	(12.1)	3.1	—	(3.8)	—	底部～体部にかけてユビオサエ＋ナデ調整。口縁部はヨコナデを施す。外面底部に板状圧痕が認められる。反転復元。
4	図 19	8	10	196	2 区 F3-y24	—	43	土師器	皿	(10.0)	2.4	—	(5.3)	—	内面は燻され、調整不明瞭。外面は底部～体部にかけてユビオサエ＋ナデ、口縁部はヨコナデを施す。重ね焼痕有。反転復元。
5	図 19	8	9	166	2 区 F3-y24	—	18	土師器	皿	(11.5)	2.8	—	(6.5)	—	平坦な底部からやや内湾ぎみに立ち上がる。内外面とも底部～体部にかけて、ユビオサエ＋ナデ、口縁部はヨコナデを施す。京都系　14 c 初 . 反転復元。
6	図 19	8	42	227	2 区 F3-y24	—	43	土師器	皿	(12.0)	2.8	—	(8.2)	—	底部～体部にかけてユビオサエ＋ナデ。口縁部にかけて強いヨコナデを施す。底部に板状圧痕が認められる。内面はユビオサエ＋ナデ調整。内面口縁部に焦げ痕があることから灯明皿の可能性。反転復元
7	図 19	8	19	148	2 区 F3-t12	—	12	土師器	皿	(10.0)	2.8	—	(5.1)	—	外面は底部～体部にかけてユビオサエ＋ナデ、口縁部にかけてヨコナデを施し、外反ぎみ。内面はユビオサエ＋ナデを施すが、磨滅が激しく、調整不明瞭。反転復元。
8	図 19	8	59	485	1 区 F3-q4	—	138	土師器	小皿	(8.0)	1.1	—	(5.6)	—	底面は糸切りのようであるが、磨滅が著しく不明瞭。内面はユビオサエ＋ナデ。体部～口縁部を回転ナデを施す。反転復元。
9	図 19	8	41	503 504	1 区 F3-t8	—	81	土師器	小皿	7.2	1.7	—	4.5	—	平坦な底部からヨコナデによりやや外反した口縁に続く。口縁部は歪で底部はユビオサエで成形。磨滅ぎみで調整不明瞭。13c 中頃。
10	図 19	8	60	481	1 区 F3-r4	—	171	土師器	小皿	(8.6)	1.2	—	(6.0)	—	底面は回転糸切りのようであるが、磨滅が著しく不明瞭。内面はユビオサエ＋ナデ。体部～口縁部をヨコナデを施す。反転復元。
11	図 19	8	14	184	2 区 F3-u11	—	34	土師器	小皿	(8.0)	1.4	—	5.8	—	外面底部は回転糸切り後ユビオサエ＋ナデ、口縁部はヨコナデを施す。 内面はユビオサエ＋ナデ調整。底部は肉厚。
12	図 19	8	25	427	1 区 F3-t9	—	139	瓦器	椀	(13.2)	4.1	—	高台径 (5.9)	—	内面は、磨滅が著しく、調整不明瞭。口縁部はヨコナデにより段をなし、やや外反する。底部は貼付け高台だが退化した段階で途切れる箇所が認められる。紀伊型Ⅲ期　13c　一部反転復元。
13	図 19	8	4	401	1 区 F3-s9	—	85	瓦器	椀	(12.0 ～ 13.5)	2.7 ～ 4.0	—	高台径 3.8	—	外面は底部から体部にかけてユビオサエ＋ナデ、口縁部にかけてヨコナデを施す。内面は磨滅のため調整不明瞭。高台は退化し、ユビオサエにより高台の呈をなす。全体として歪である。紀伊型Ⅳ - 2 期 14c 前半。一部反転復元
14	図 19	8	47	440	1 区 F3-t8	—	150	瓦器	椀	(13.0)	2.2	—	(7.1)	—	摩耗により灰色を呈する。底面～体部かけてユビオサエで成形し、ナデ調整。Ⅳ期か。　14 c 前半。反転復元
15	図 19	8	24	293	1 区 F3-v8	3-1 層	—	土師質	土釜 B	(24.4)	(4.5)	—	—	—	体部内面に板状工具によるナデ。外面は磨滅のため調整不明瞭。口縁部はヨコナデを施す。12 ～ 13c 反転復元。
16	図 19	8	52	106	2 区 f3-v20	—	2	土師質土器	土釜 B	(24.7)	(4.4)	—	—	—	頸部はくの字に屈曲し、体部は板状工具によるナデ調整をおこなう。口縁部はヨコナデ調整。内面に当て具痕らしきものが認められる。反転復元。
17	図 19	8	20	206	2 区 F3-x24	—	43	土師質	土釜 B	(30.4)	(8.7)	—	—	—	外面体部は工具によるナデ（不明瞭）。頸部はヨコナデを施す。内面体部は板状工具でのナデ、当て具痕、ユビオサエ痕が認められる。12 ～ 13c 反転復元
18	図 19	8	51	9 9	2 区 f3-u18	—	2	土師質土器	土釜 A	(26.8)	(3.9)	—	—	—	頸部はくの字に屈曲し、体部は板状工具によるナデ調整をおこなう。口縁部はヨコナデ調整。12 ～ 13c。反転復元。
19	図 19	8	50	374	1 区 F3-t10	—	71	土師質土器	土釜 B	(20.4)	(9.0)	—	—	—	鍔は貼付け。内面から鍔にかけてヨコナデを施している。外面体部は工具によるナデ調整。口縁端部は内側に折り返しで、外面全体に煤付着。反転復元。
20	図 19	8	46	423	1 区 F3-s7	—	133	須恵質（東播系）	捏鉢	(25.4)	(2.5)	—	—	—	両面回転ナデ重ね焼痕（口縁部のみ自然釉付着）Ⅳ期　14c 前半。
21	図 19	8	45	53	1 区 F3-r12	3 層	—	須恵質（東播系）	捏鉢	—	(3.0)	—	—	—	両面回転ナデ重ね焼痕（口縁部のみ自然釉付着）Ⅱ期　12c 後～ 13c 初。
22	図 19	8	23	291	1 区 F3-u10	3-1 層	—	須恵質（東播系）	捏鉢	—	(4.4)	—	(9.0)	—	外面底部は回転糸切り（方向不明）。体部は回転ナデを施す。 内面見込みはナデ調整。反転復元。
23	図 19	9	58	98	2 区 F3-u18	—	2	瓦質	火舎	—	(4.7)	—	(35.6)	—	脚部は剥離しているが、脚部を接着するためのキザミ痕が残る。立ち上り部にキザミを入れる際についたと思われる痕有。底部には敷物の圧痕が見られる。反転復元
24	図 19	8	49	445	1 区 F3-s9	—	189	瓦質土器	甕	—	—	—	—	—	内面は磨滅のため、調整不明瞭。口縁部はヨコナデ。頸部は幅 0.15cm のやや粗い篦磨きを施す。
25	図 19	8	21	229	2 区 F3-v18	—	45	無釉陶器（備前）	擂鉢	(24.9)	(5.8)	—	—	—	轆轤による回転ナデ。口縁部に自然釉が付着している。擂り目 8 本 /2.4cm。間壁編年Ⅳ期 A　14 後～ 15c　反転復元。
26	図 19	8	16	113	2 区 F3-u16	—	4-B	無釉陶器（備前）	擂鉢	—	(5.4)	—	—	—	内外面とも轆轤による回転ナデ。胎土は密であるが、1mm 以下の石英を微量含む。擂り目不明。間壁編年 4 期 B　15c　断面のみ
27	図 19	8	44	56	1 区 F3-s16	3 層	—	無釉陶器（備前）	擂鉢	(26.6)	(4.7)	—	—	—	内外面とも轆轤による回転ナデ（回転方向不明）擂り目不明。間壁編年Ⅳ期 B　15c　反転復元。
28	図 19	9	1	424	1 区 F3-s7	—	133	施釉陶器（瀬戸美濃）	平碗	(16.0)	(6.3)	—	—	—	露胎は 2.5Y8/2 灰白、釉は灰釉で 5Y7/3 浅黄を呈する。口縁部に釉がかからない箇所有。外面に工具の当て痕？　中Ⅳ～後Ⅰ期。反転復元
29	図 19	9	56	498	1 区 F3-s7	—	134	無釉陶器（備前？）	壺	(19.5)	(11.4)	—	—	—	口縁部～肩部にかけて回転ナデ、外面に自然釉が付着する。又、肩部外面に櫛目を施す。57 と同一個体の可能性有。反転復元
30	図 19	9	57	498	1 区 F3-s7	—	134	無釉陶器（備前？）	壺	—	(8.8)	—	(20.0)	—	底部～体部にかけて板状工具によるナデを施す。底部外面には砂が付着し、内面には自然釉が付着。反転復元
31	図 20	9	55	501	1 区 F3-t6	—	166	無釉陶器（備前）	四耳壺	(14.0)	(7.9)	—	—	—	回転ナデ。内面にはユビオサエ痕が認められる（耳を接着時のものか？）表面に自然釉付着。間壁編年Ⅳ期 B　15c
32	図 20	8	17	129	2 区 F3-u14～16	—	4	無釉陶器（備前）	甕	—	(4.7)	—	—	—	内外面とも轆轤による回転ナデ。須恵質焼成。間壁編年Ⅱ期後半。13c 後半。
33	図 20	8	15	98	2 区 F3-u18	—	2	無釉陶器（備前）	甕	—	(5.5)	—	—	—	内外面とも轆轤による回転ナデ（回転方向:右回り）。玉縁の一部に自然釉付着する。間壁編年Ⅲ期 A　13c 末～ 14c 初。
34	図 20	8	48	108	1 区 F3-w20	—	2	無釉陶器（備前）	甕	(32.5)	(5.9)	—	—	—	轆轤による回転ナデ。間壁編年Ⅲ期 B　13 c 。反転復元。
35	図 20	8	11	135	2 区 F3-u14～17	—	4	無釉陶器（備前）	甕	(30.0)	(8.7)	—	—	—	内外面とも轆轤による回転ナデ（回転方向:右回り）。頸部～体部にかけ灰かぶりによる自然釉付着。間壁編年Ⅲ期　13c 後～ 14c 前。反転復元

出土遺物観察表

数値の（ ）付は、残存値を示す。

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号層位	遺物種類	器種	法量 長さ（cm）口径（cm）	法量 幅（cm）器高（cm）	法量 厚さ（cm）最大径（cm）	法量 底径（cm）	石材	備考
36	図 20	9	3	105	2 区 F3-v20	—	2	青磁	碗	（15.8）	（7.1）	—	—	—	内外面ともに無文で全体に貫入有。龍泉窯系無文直口碗　。14 c 後半　反転復元
37	図 20	9	2	108	2 区 F3-w20	—	2	青磁	碗	—	（2.6）	—	（5.0）	—	露胎は N8/0 灰白、釉は 2.5GY6/1 オリーブ灰。畳付き、高台裏まで施釉されている。見込みに草花文。14 c 後半。反転復元
38	図 20	9	S1	319	1 区 F3-q1	基盤層直上	—	石器	石鏃	（1.9）	1.6	0.3	—	サヌカイト	凹基式石鏃で先端が欠けている。縄文時代晩期
39	図 20	9	M2	174	2 区 F3-w18	—	25	金属製品（銅）	刀子	（9.4）	1.4	0.5	—	—	全体に緑青が発生し、銅製と思われる。
40	図 20	9	M1	294	1 区 F3-v9	3-1 層	—	金属製品	刀子	（10.0）	（1.3～2.0）	刀部 0.1～0.5 柄（？）部（0.35）	—	—	鉄製で、先端が欠けている。
41	図 20	9	5	99	2 区 F3-u18	—	2	瓦	軒丸瓦	径（13.5）	（4.8）	厚さ 2.2	—	—	文様は三巴文（向かって左巻き）、巴の尾が長く圏線に付く。頭は丸みを帯びている。連珠は 15 個残存（推定 28 個程度）。外側の圏線がなく、周縁が高い。13c 中～ 14c 初。
42	図 20	9	6	189	2 区 F3-u17	—	36	瓦	軒丸瓦	径（13.4）	（3.9）	—	—	—	文様は三巴文（向かって左巻き）、巴の尾が長く圏線に付いていて、頭は丸みを帯びている。連珠は 7 個残存（推定 28 個程度）。外側の圏線がなく、周縁が高い。文様部に離れ砂が付着。表面は燻している。13c 中～ 14c 前。
43	図 20	9	54	243	1 区 F3-s6	—	1・2 層	瓦	軒平瓦	（4.7）	幅（6.3）高さ（2.9）	2.1	—	—	文様は均整唐草文え界線なし。顎貼付け技法で接着。文様部に離れ砂付着。周縁から瓦当裏面にかけて篦ナデを施す。裏面は強いヨコナデ。13c 中～ 14c 前。
44	図 20	9	7	105	2 区 F3-v20	—	2	瓦	軒平瓦	長さ 4.7 ～ 6.0	幅（10.5）	厚さ 4.1	—	—	文様は均整唐草文で界線なし。顎貼付け技法により接着。瓦当裏面は板状工具によるヨコナデを施す。凹面に離れ砂が微量残存。表面は燻されている。13c 中～ 14c 初。
45	図 20	9	8	163	2 区 F3-x24	—	18	瓦	軒平瓦	長さ（7.5）	幅（7.0）	厚さ 1.9 ～ 3.8	—	—	文様は均整唐草文で界線なし。顎貼付け技法により接着。瓦当裏面は強いヨコ篦ナデを施し、台の匠痕が残る。全体的に離れ砂が残存。表面は 10YR6/2 黄褐～ 2.5Y6/1 黄灰。13c 中～ 14c 前。
46	図 20	10	39	99	2 区 F3-u18	—	2	瓦	丸瓦	長さ（9.0）	高さ 7.0 幅 12.9	厚さ 2.9	—	—	凹面に布目痕有。玉縁は水平方向に幅 5.0cm で篦ナデ、胴は側端部で幅 2.0cm で篦ケズリを施す。凸面は篦状工具による縦方向へのナデ調整。玉縁長 5cm
47	図 21	9	13	99	2 区 F3-u18	—	2	瓦	丸瓦	長さ 15.9	高さ 6.8 幅 12.4	—	—	—	凹面は布目痕有。玉縁端部にヨコ篦ナデ、接合部に強いナデを施す。凸面は玉縁部に工具によりナデを施す、縦縄目叩き痕が見られるが。焼きが甘く断面土色: 2.5Y8/3 淡黄で 2 次焼成の可能性も。玉縁長 6cm。
48	図 21	10	29	345 347	1 区 F2-n25 F3-n1	—	50	瓦	丸瓦	長さ（21.0）	高さ 6.7 幅 12.0	厚さ 2.0	—	—	凹面は布目痕、篦状工具の当て痕が認められる。広端部から 8cm、側端から 1.5 ～ 2cm 篦ケズリを施す。凹面は縦方向に篦ナデを施す。工具の圧痕が認められる。
49	図 21	10	18	320	1 区 F3-n1	—	50	瓦	丸瓦	長さ（25.5）	高さ 6.9 幅 12.1	—	—	—	凹面は布目痕有り、玉縁端部に幅 3.0cm で面取り、水平篦ナデを施している。胴側端に幅 2cm で篦ナデを施す。凸面は縦縄目叩き痕多数残る。表面は燻した呈であるが、磨滅激しい。
50	図 21	10	32	323 340	1 区 F2-n25 F3-n1	—	50	瓦	丸瓦	長さ（21.7）	高さ 6.4 幅 12.0	厚さ 2.1	—	—	凹面は布目痕と側端部に幅 2 ～ 2.5cm の篦ケズリが認められる。広端部に幅 5.0cm のナデ調整。故意に打ち欠いた呈の箇所がある。凸面は縦方向の篦ナデを施す。
51	図 22	10	37	241	1 区 F3	—	1・2 層	瓦	丸瓦	長さ（24.7）	高さ 6.4 幅 12.0	厚さ 2.1	—	—	凹面に玉縁まで布目痕、コビキ A 痕有。側端部を幅 2 ～ 3cm の篦ケズリを施す。凸面は縦に縄目叩き後にナデ、玉縁は水平に工具によりナデを施す。玉縁長 5cm
52	図 22	10	30	98	2 区 F3-u18	—	2	瓦	丸瓦	長さ（14.7）	高さ 6.5 幅 12.0	厚さ 2.3	—	—	凹面は玉縁まで布目痕が残るが、端部 1.0cm ナデを施す。玉縁から胴まで側端部を幅 2.0cm で篦ケズリを施す。凸面は玉縁は水平方向、胴は縦方向に篦ナデ調整。縁長 5cm。
53	図 22	10	26	99	2 区 F3-u18	—	2	瓦	丸瓦	長さ（17.5）	高さ 6.5 幅 12.0	厚さ 2.2	—	—	凹面はコビキ A、布目痕に一部ナデを施す。玉縁端部（幅 2.5cm）と側端部（幅 2.5cm）を篦ナデ調整。玉縁部に吊り紐痕をナデで消した痕跡有。凸面は縦縄叩き後、ナデ調整。玉縁長 5cm。
54	図 22	10	22	115	2 区 F3-u15	—	4－2 層	瓦	丸瓦	長さ（18.0）	高さ 6.9 幅 13.9	厚さ 2.0	—	—	凹面にコビキ A 痕（広端部からみて左奥→右手前へ）、広端部から 8cm 程度篦状工具で強くナデを施す。側端部は幅 2.5cm 篦ナデ調整。凸面は縦縄目叩きのちナデ調整を施す。
55	図 23	10	61	159	2 区 F3-x23	—	18	瓦	丸瓦	長さ（20.7）	高さ 7.6 幅（12.9）	厚さ 2.2	—	—	全体的に歪。凹面は工具による押し痕が複数見られ、胴の側端部に幅 2.5cm の篦ケズリを施す。布の重なりによる深い沈線が玉縁まで走る。吊り紐痕も確認できる。凸面は磨滅しているものの縦縄目叩き痕が残り、玉縁は工具によりヨコナデを施されている。玉縁長 6cm。
56	図 23	11	28	343 347	1 区 F2-n25 F3-n1	—	50	瓦	丸瓦	長さ（19.6）	高さ 6.4 幅 12.0	厚さ 2.3	—	—	凹面は布目痕（布の皺痕有）が残る。側端部は縦方向に幅 2 ～ 2.5cm で篦ケズリ、玉縁は水平方向にヨコナデの後、縦にナデ調整を施す。玉縁を上に見て向かって右側に吊り紐とみられる痕有。玉縁長 4.5cm
57	図 23	10	31	333 344 350	1 区 F2-n25 F3-n1	—	50	瓦	丸瓦	長さ（14.6）	高さ 6.6 幅 12.7	厚さ 2.2	—	—	凹面は布目痕と一部ナデ調整が認められる。側端から幅 2 ～ 3.5cm で篦絵刷りを施す。玉縁端部は篦ケズリによる幅 3.5cm の面取りが認められる。凸面は縦方向に篦ナデを施す。玉縁長 5cm
58	図 23	11	38	211	2 区 F3-x24	—	43	瓦	丸瓦	長さ（14.5）	高さ 6.9 幅（11.8）	厚さ 2.0	—	—	凹面は磨滅により不明瞭であるが、布の皺痕、玉縁に型の圧痕があり、側端部は幅 2cm で篦ケズリを施す。凸面は玉縁接合部に工具によりヨコナデを施す玉縁端部にタタキ痕が残る。玉縁長 7cm
59	図 23	11	34	205 219	2 区 F3-xy24.25	—	43	瓦	丸瓦	長さ（29.1）	高さ 6.6 幅 14.9	厚さ 2.0	—	—	凹面はコビキ A、粘土接合痕が認めらる。側端部は幅 2cm の篦ケズリ、胴は全体に工具でナデを施す。凸面は全体に縦縄目叩きを施した後、ナデ調整。玉縁長 7cm 以上。
60	図 24	11	35	338	1 区 F3-n1	—	50	瓦	平瓦	長さ（11.4）	高さ 5.0 幅 20.6	厚さ 2.2	—	—	凹面に工具の当て痕、凸面は篦ナデ調整が認められる。 両面とも板の圧痕、離れ砂の付着が認められる。
61	図 24	11	36	329 343	1 区 F2-n25 F3-n1	—	50	瓦	平瓦	長さ（18.3）	高さ 5.0 幅 21.1	厚さ 2.0	—	—	凹面は両側端部面取りを施し、板目圧痕が認められる。凸面はコビキ A 痕、工具の当て痕があり、両面に離れ砂が付着。
62	図 24	11	27	98	2 区 F3-u18	—	2	瓦	平瓦	長さ（12.1）	高さ 5.7 幅 19.6	厚さ 1.9	—	—	凹面は頭端部を幅 1.5cm 面取りを施す。両面とも板状工具によるナデ調整。離れ砂付着。
63	図 24	11	33	164	2 区 F3-x24	—	18	瓦	平瓦	長さ（19.3）	高さ 5.6 幅 23.9	厚さ 1.9	—	—	凹面にコビキ A 痕、篦状工具でのナデ調整が認められる。 両面に板の圧痕（製作台？）全面褐色で 2 次焼成の可能性がある。
64	図 24	11	12	160	2 区 F3-x23	—	18	瓦	平瓦	長さ（21.1）	幅 20.3	厚さ 1.8	—	—	両面にコビキ A 痕。篦ナデを施し、離れ砂付着。 凸面に製作台の板の圧痕らしきものが認められる。

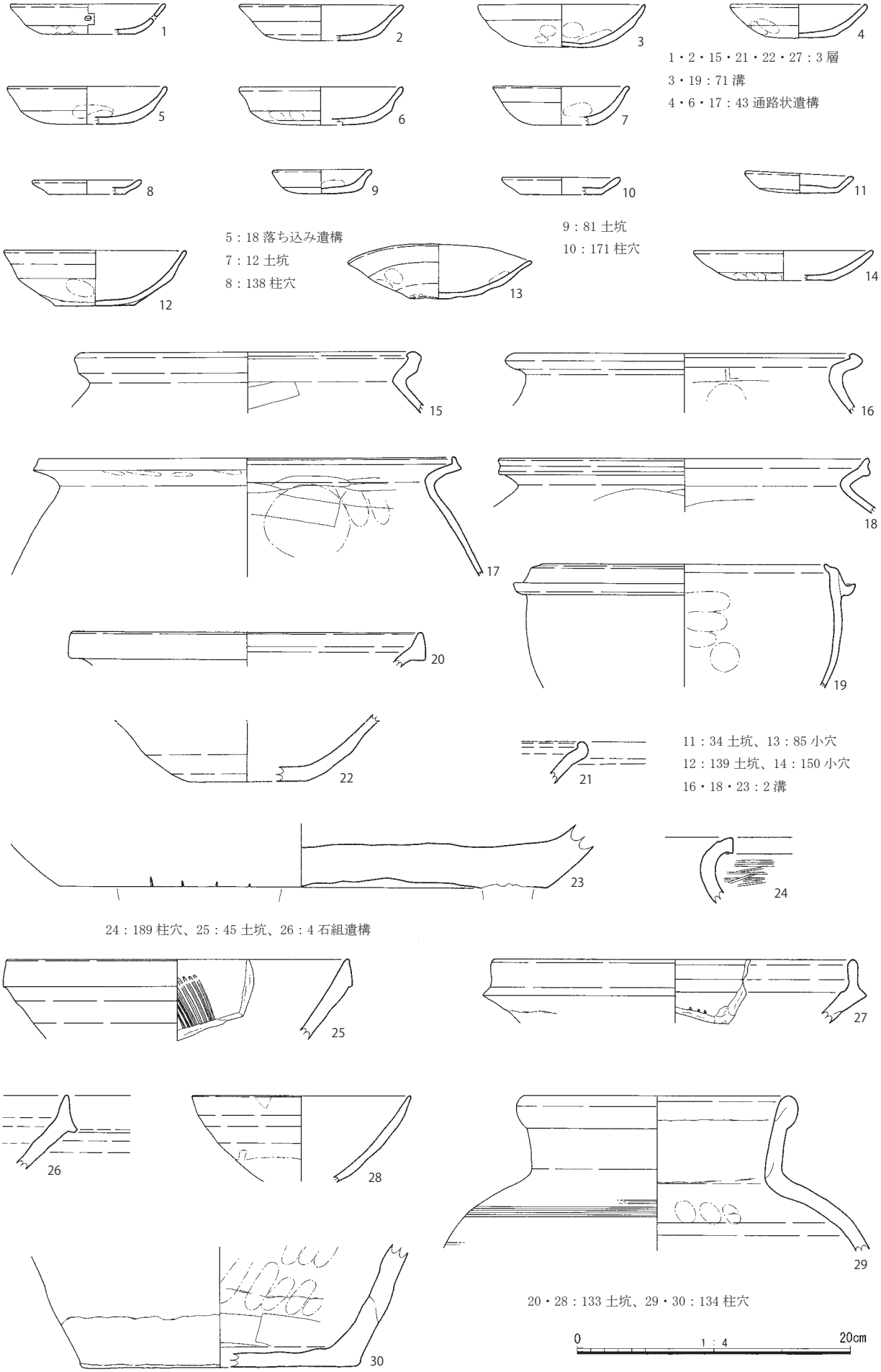


図 19　1・2 区　出土遺物実測図 1

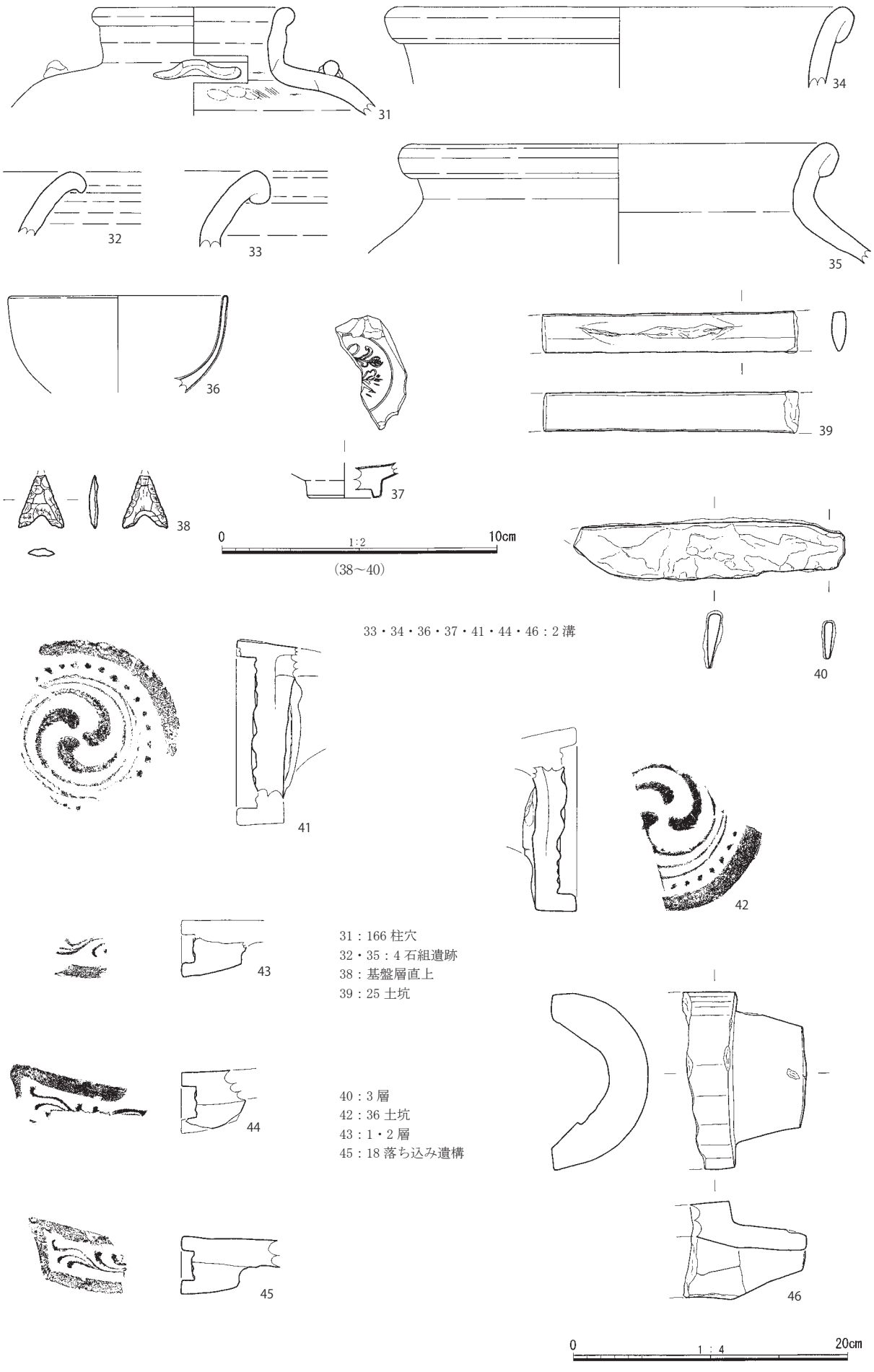


図 20　1・2 区　出土遺物実測図 2

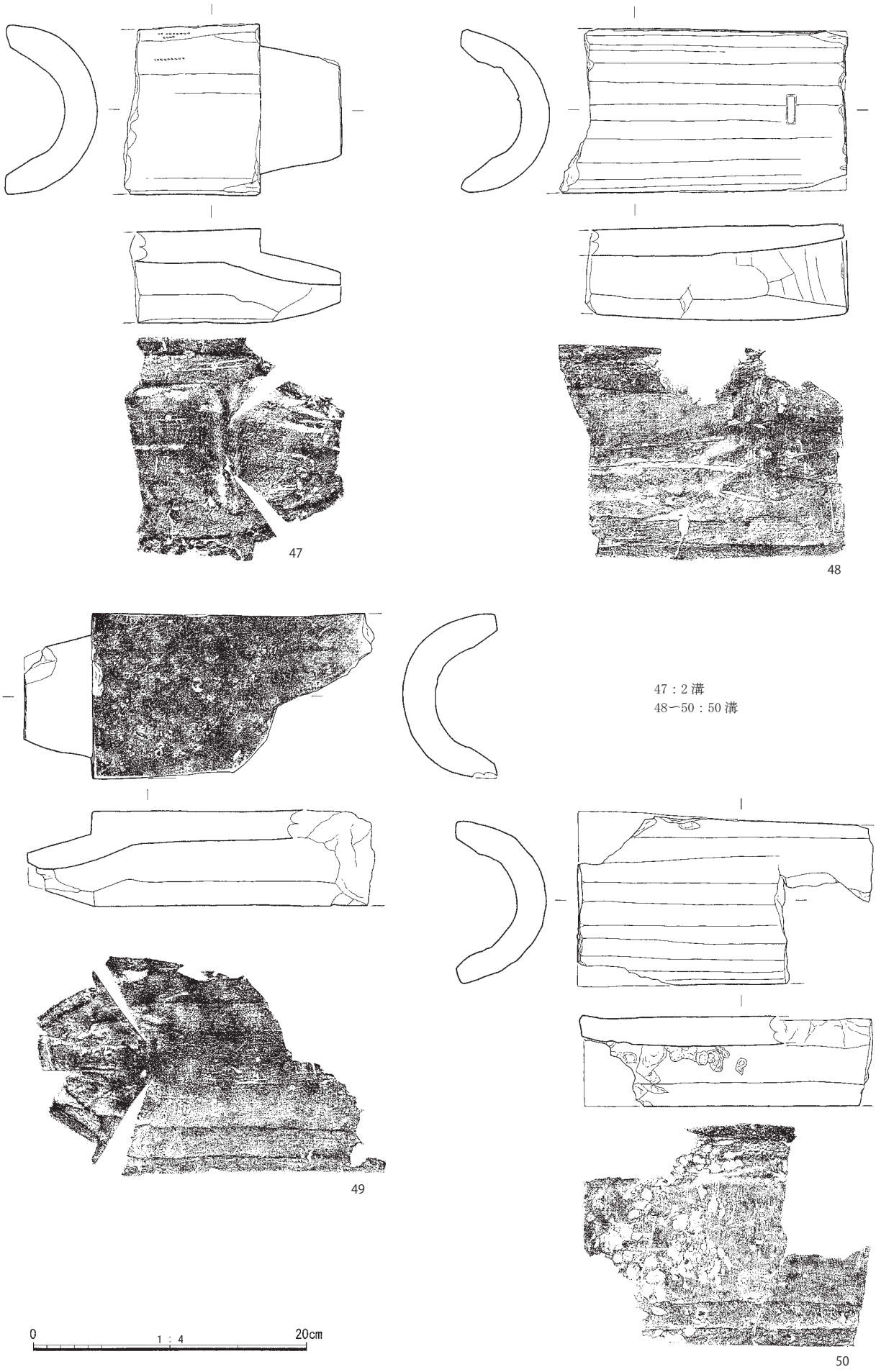
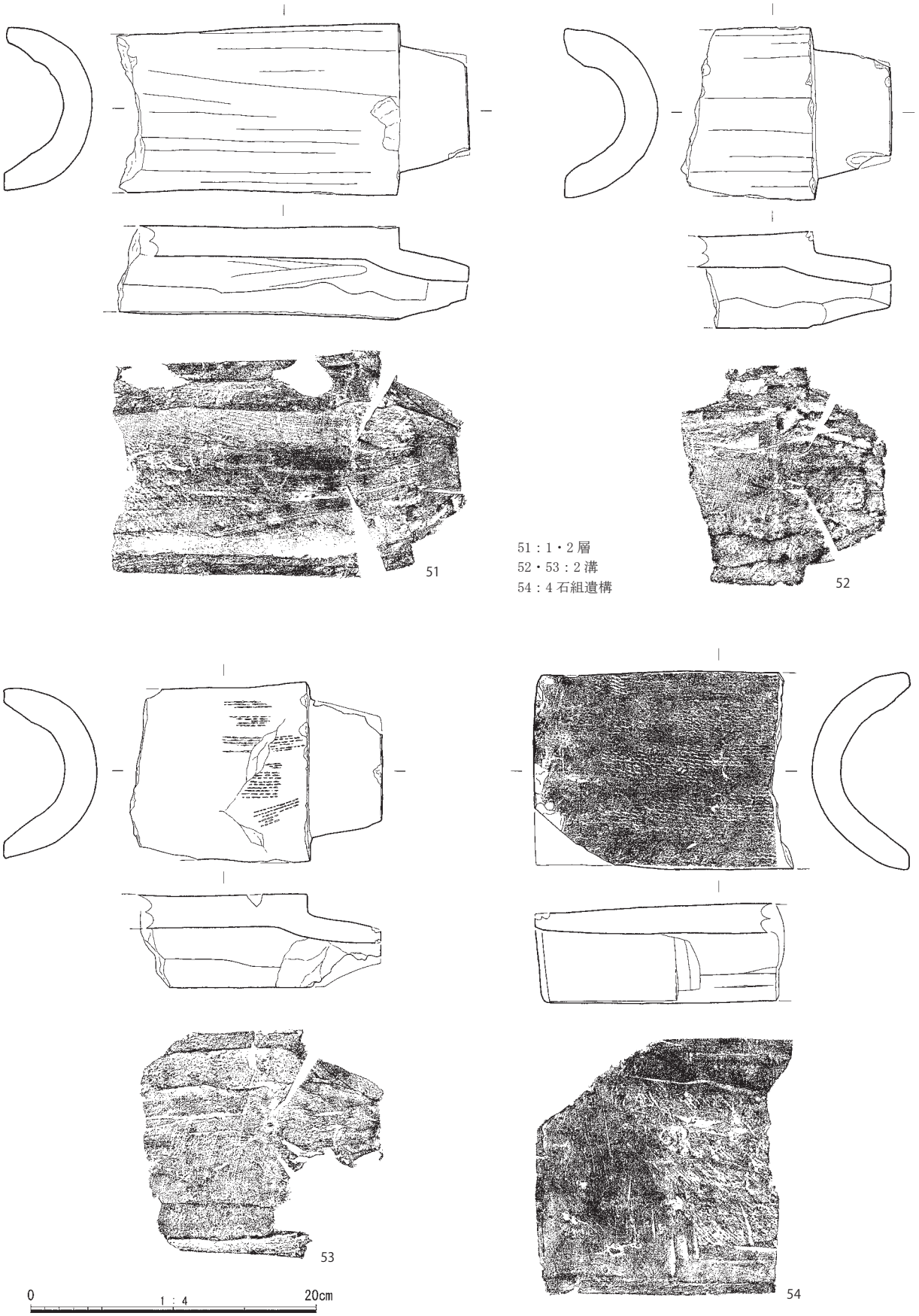


図 21　1・2 区　出土遺物実測図 3



51：1・2層
52・53：2溝
54：4石組遺構

図22　1・2区　出土遺物実測図4

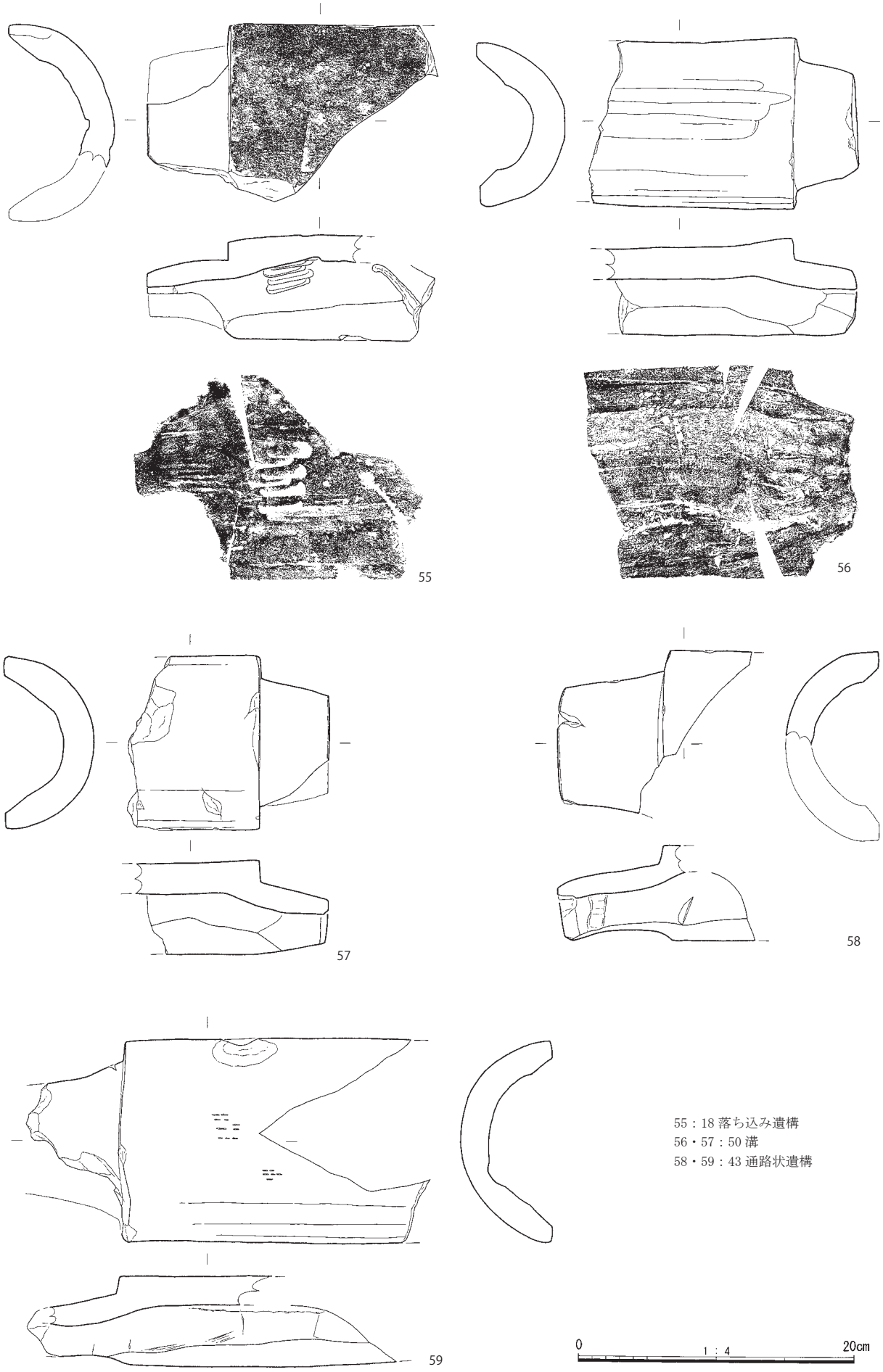
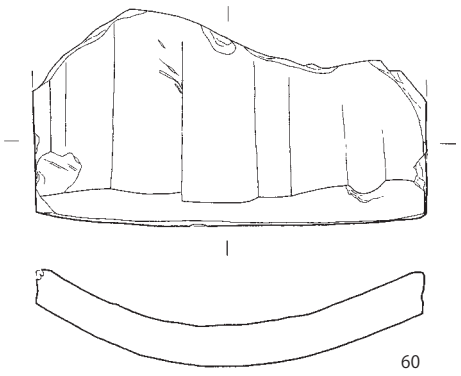
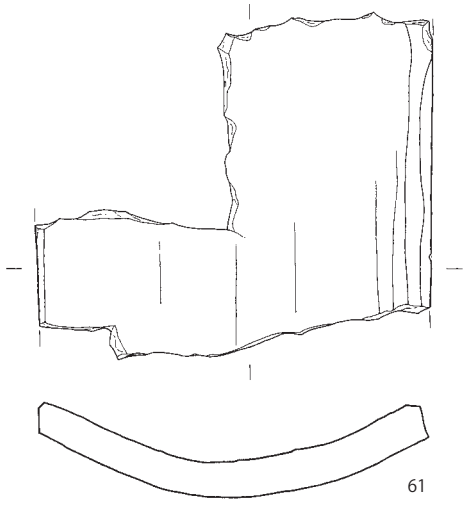
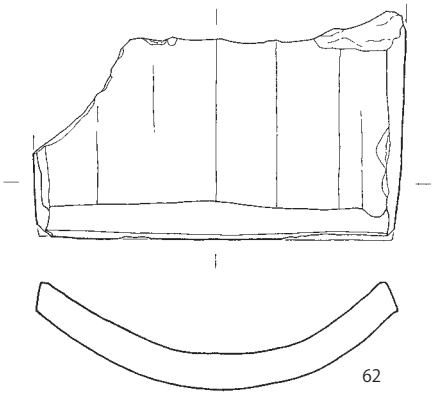


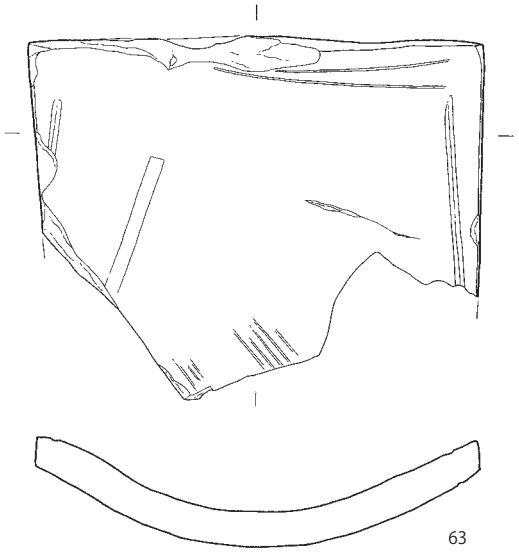
図 23　1・2 区　出土遺物実測図 5

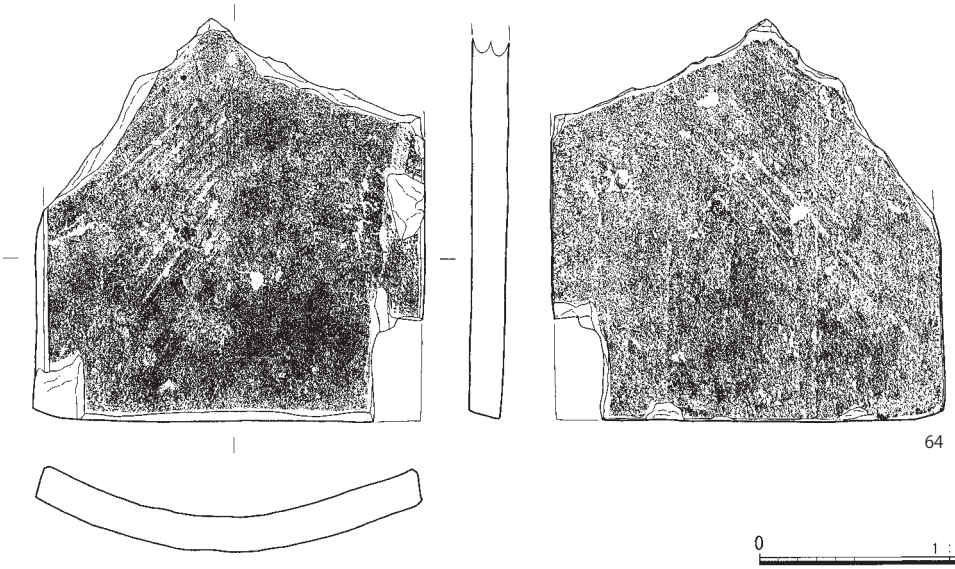




60・61：50 溝
62：2 溝
63・64：18 落ち込み遺構







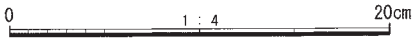


図 24　1・2 区　出土遺物実測図 6

写真図版1　1・2区調査地全景

1　調査地全景（真上から：上側が北）

写真図版2　1・2区調査地全景

1　1区調査区全景（東上空から）

2　1区調査区全景（真上上空から：右側が北）

1　2区調査区全景（東上空から）

2　2区調査区全景（真上上空から：右側が北）

1　2溝完掘状況（東から）

2　2溝南セクション土層（東から）

3　4石組遺構検出状況（東から）

4　4石組遺構東西セクション土層（北から）

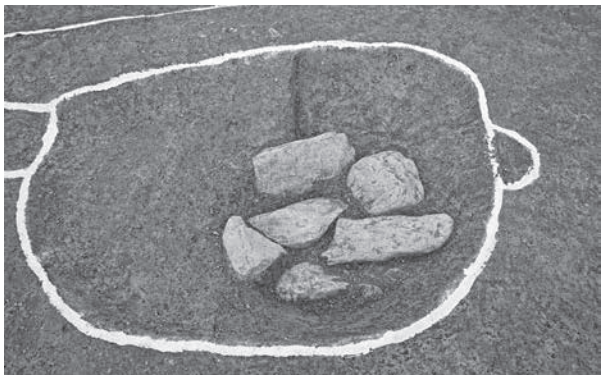
5　4石組遺構南北セクション土層（東から）

6　4石組遺構完掘状況（東から）

7　12土坑セクション土層（東から）

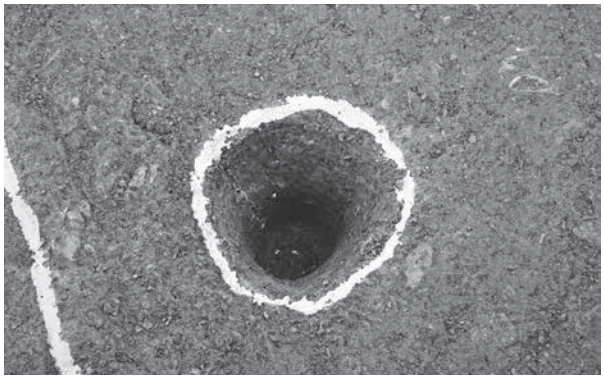
1　18 落ち込み状遺構全景（南から）

2　18 落ち込み状遺構土層（北から）

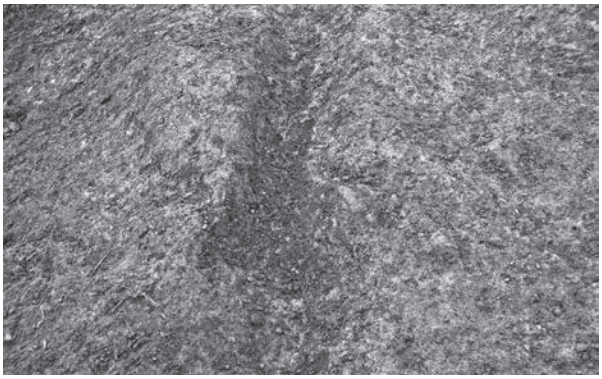


3　34 土坑石出土状況（南から）

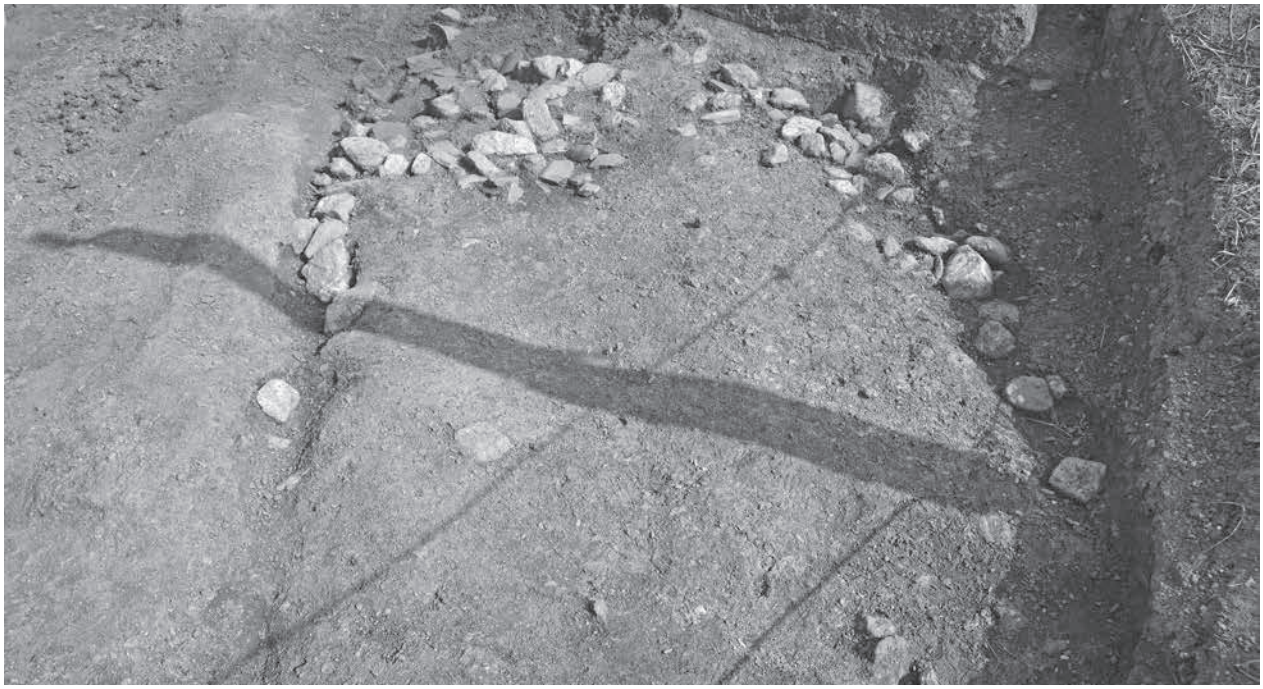
4　34 土坑土層（東から）



5　36 土坑完掘状況（南東から）

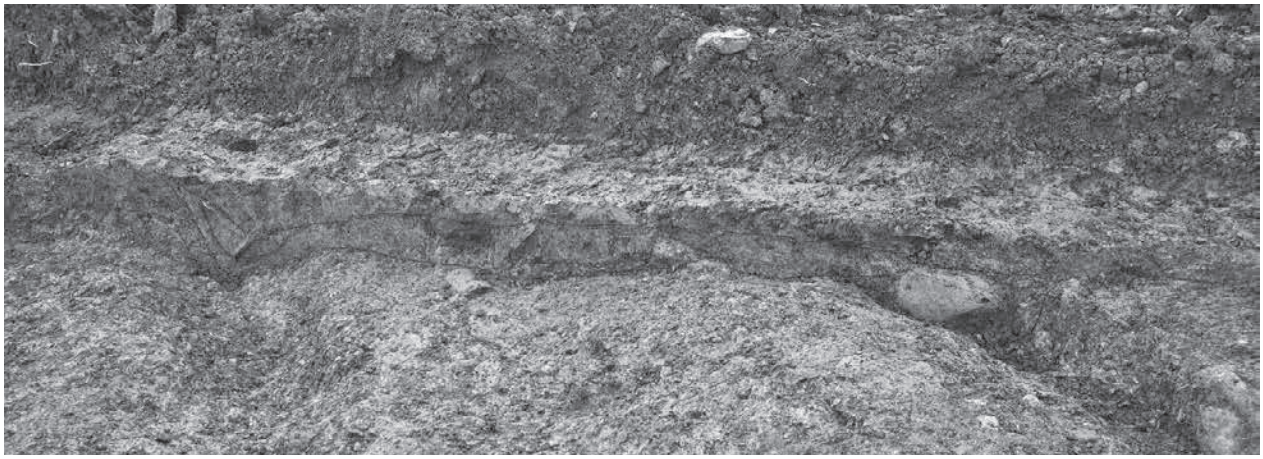


6　43 通路状遺構北側溝炭化物出土状況（西から）

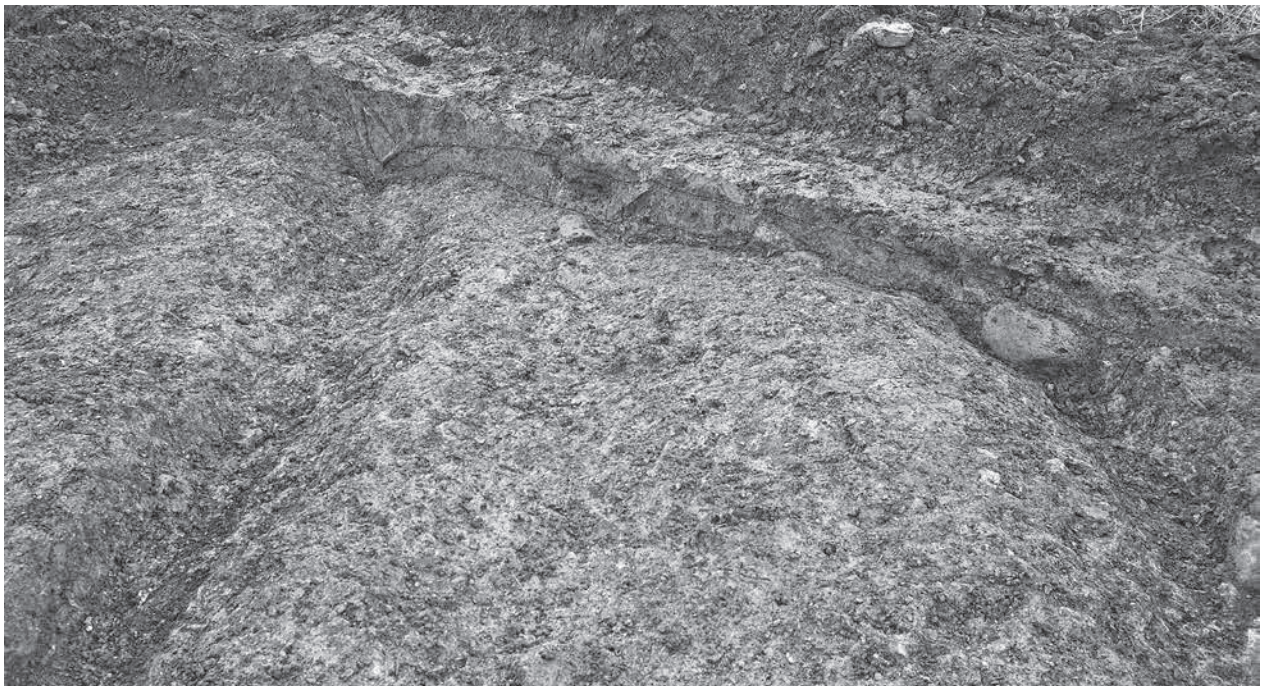


7　43 通路状遺構出土状況（西から）

1　43 通路状遺構出土状況（西から）

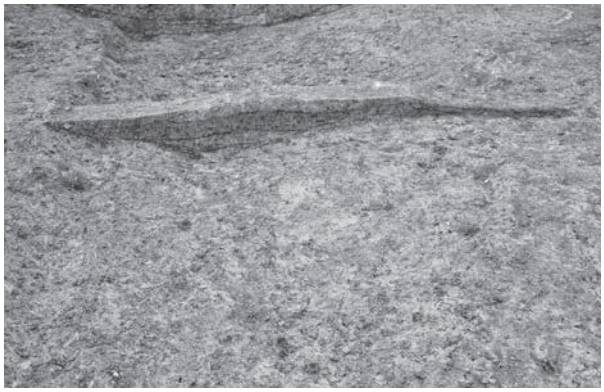


2　43 通路状遺構土層（西から）



3　43 通路状遺構完掘状況（西から）

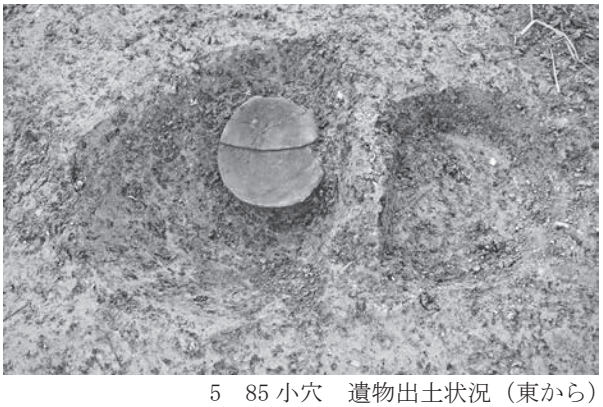
1　50 溝　瓦出土状況（南から）



2　50 溝　土層（南から）

3　71 溝　土層（西から）

4　81 土坑土層（西から）

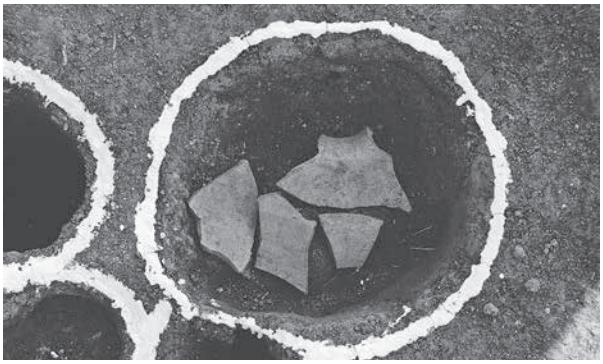


5　85 小穴　遺物出土状況（東から）

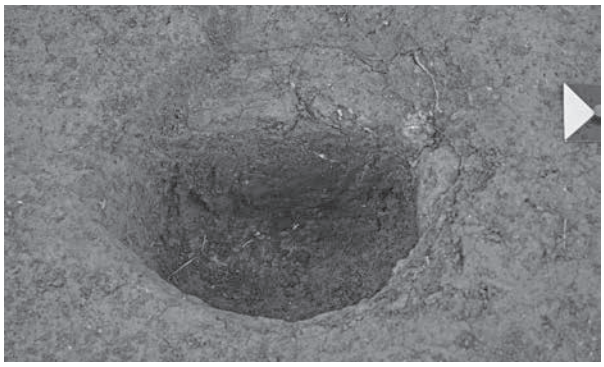
6　133 柱穴　土層（南から）

7　134 柱穴遺物出土状況（南から）

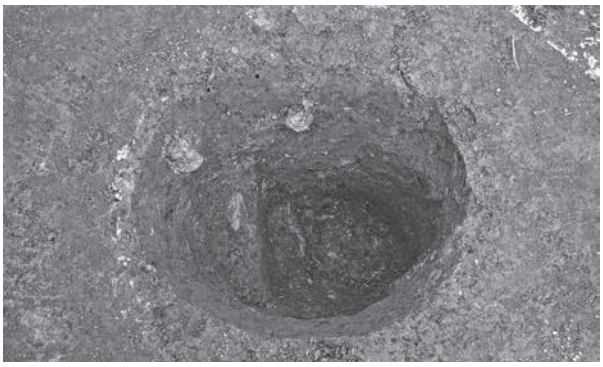
1　138 柱穴土層（東から）



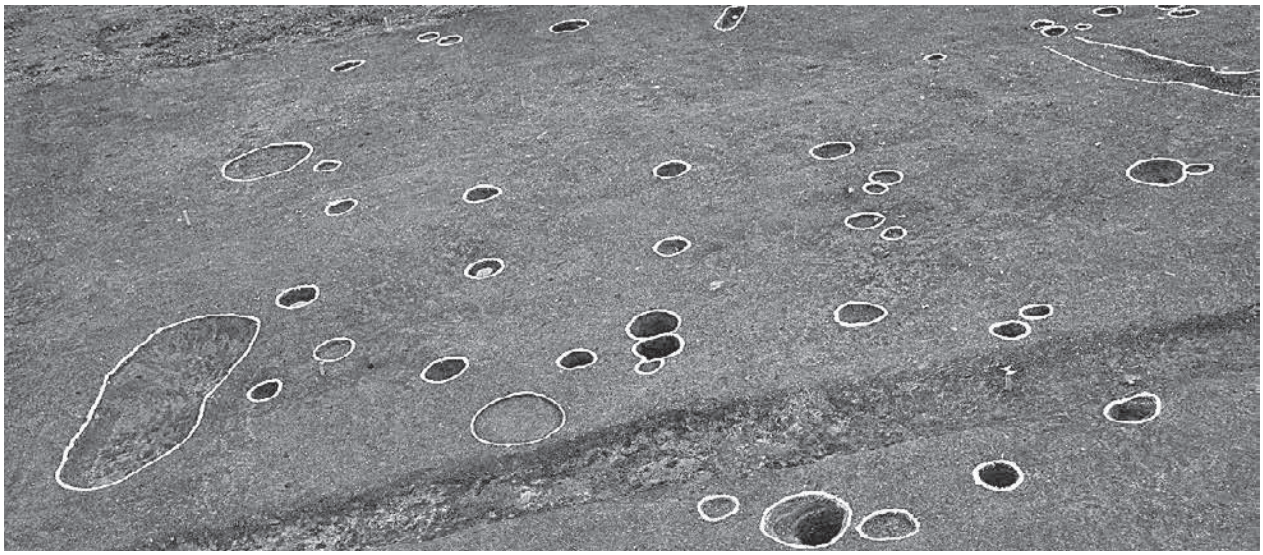
2　166 柱穴遺物出土状況（西から）



3　171 柱穴土層（東から）



4　189 柱穴完掘状況（南から）



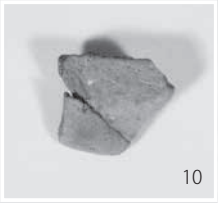
5　掘立柱建物 1 完掘状況（西から）

5　掘立柱建物 1 ～ 7 完掘状況（南から）

1

6

8


10

9

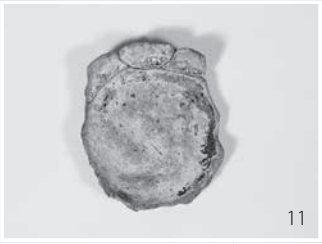
5

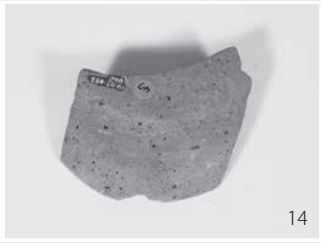
7

3

2

4

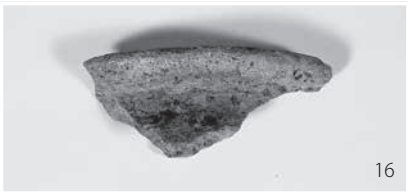

11

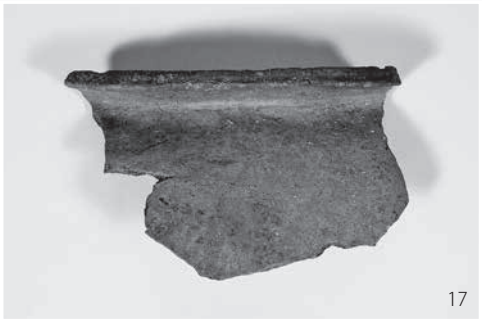

14

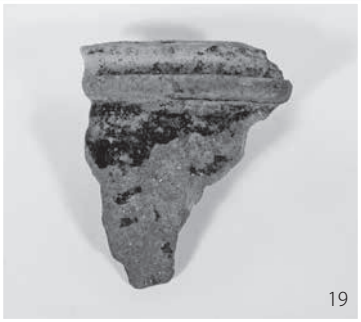
12

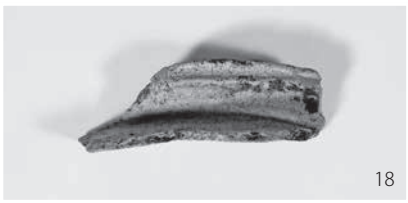
13

15

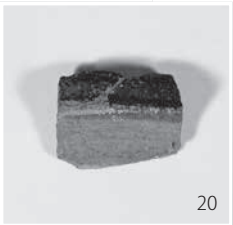

16


17

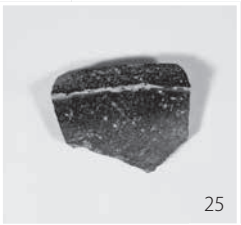

19

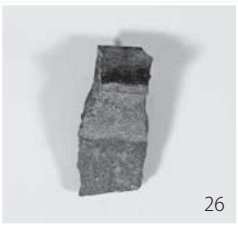

18

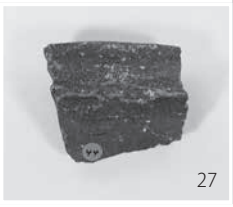
22

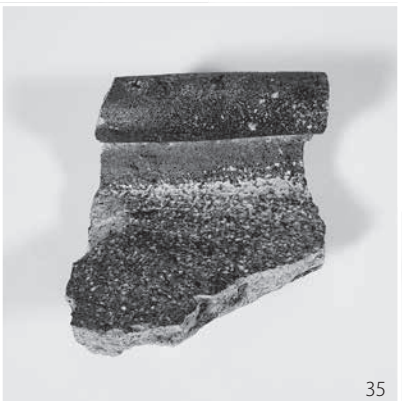

20

21


25

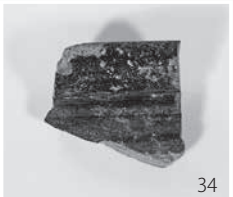

26


27


35

24

32


34

33

1・2・15・21・22・27:3層、3・19:71溝、5:18落ち込み遺構、4・6・17:43通路状遺構、7:12土坑
8:138柱穴、9:81土坑、10:171柱穴、11:34土坑、13:85小穴、12:139土坑、14:150小穴
16・18・33・34:2溝、24:189柱穴、25:45土坑、26・32・35:4石組遺構、20:133土坑

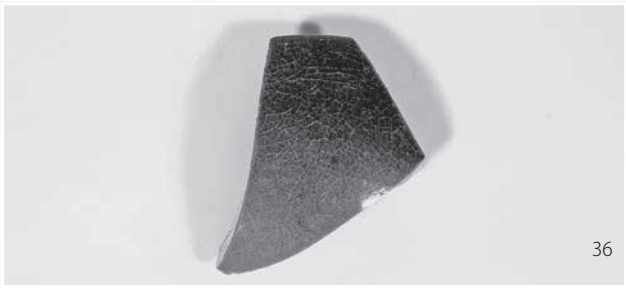
28

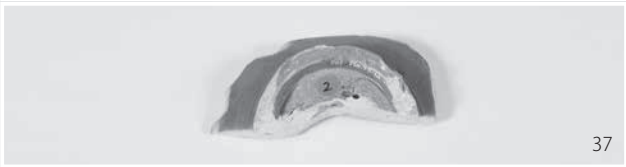
29

31

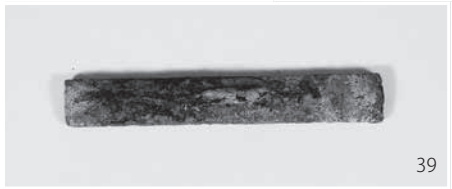
30

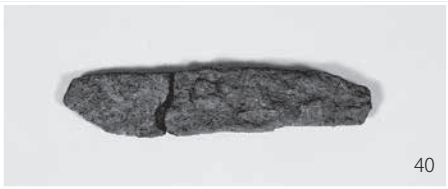
23


36


37

38


39

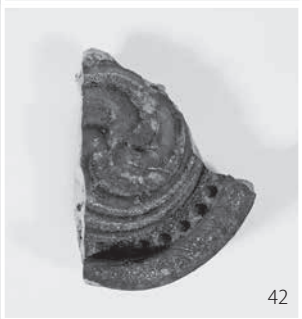

40

43

44

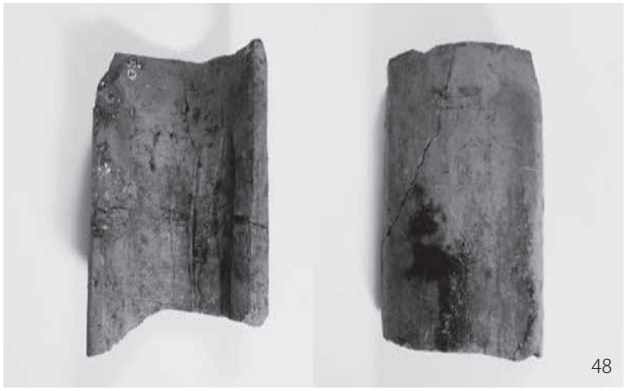
45

41


42

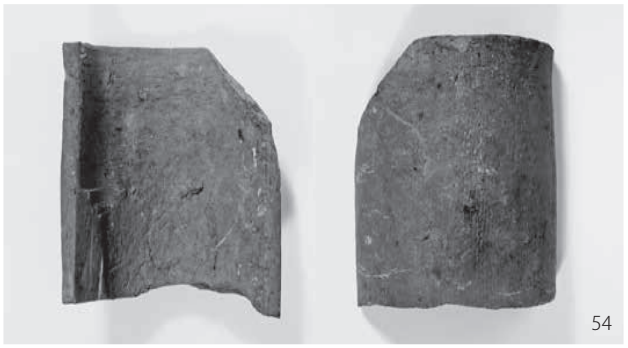
47

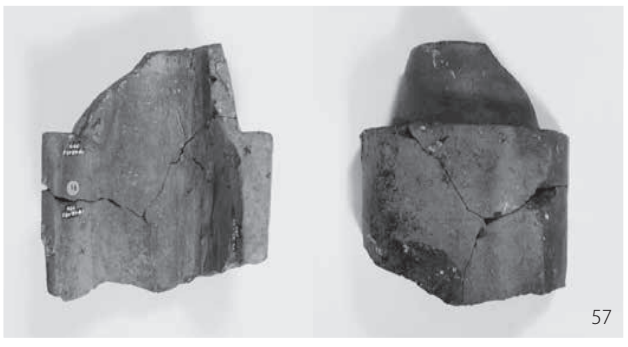
23・36・37・41・44・47:2溝、28:133土坑、29・30:134柱穴、31:166柱穴、38:基盤層直上
39:25土坑、40:3-1層、42:36土坑、43:1・2層、45:18落ち込み遺構

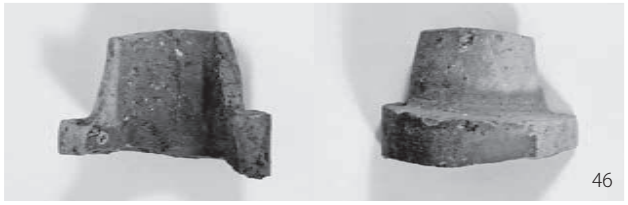

48

50

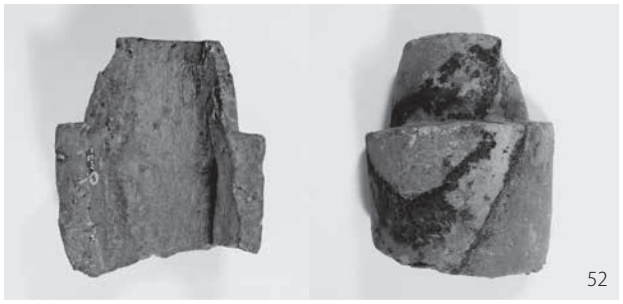
51


54


57


46

49


52

53

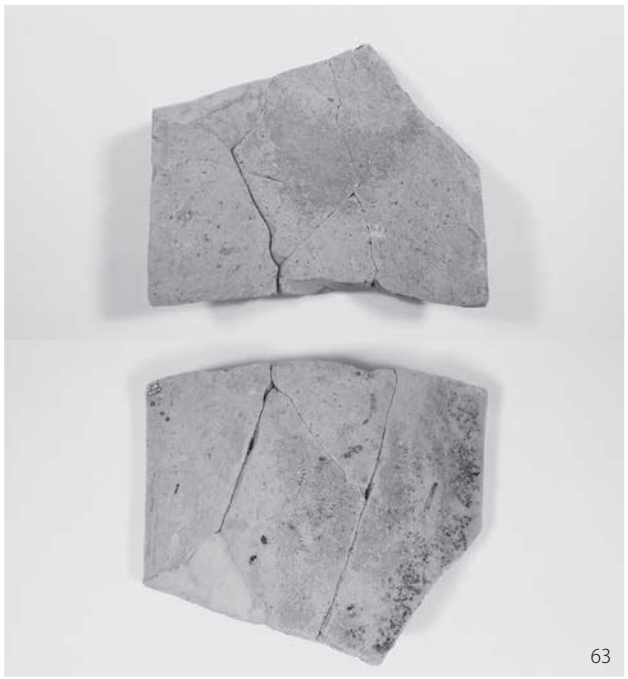
55

46・52・53:2溝、48～50・57:50溝
51:1・2層、54:4石組遺構、55:16溝

56

59

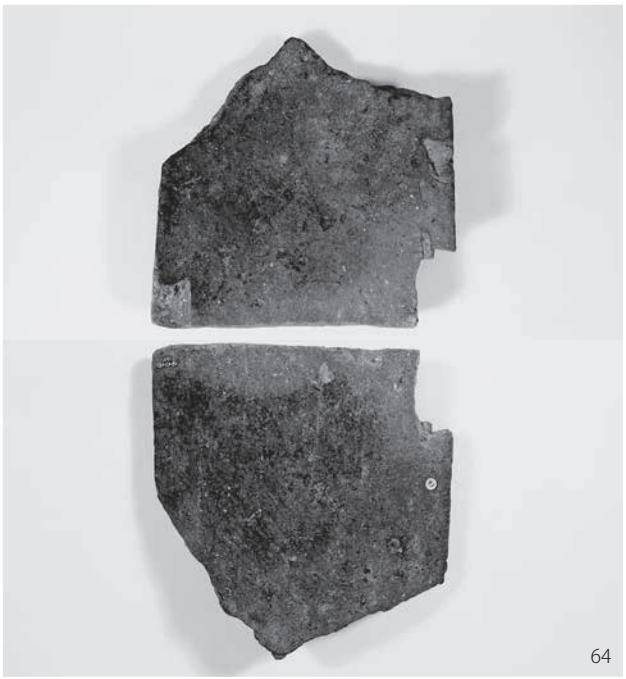
61


63

58

60

62


64

56・60・61：50溝、58・59：43通路状遺構
62：2溝、63・64：18落ち込み遺構

報告書抄録

ふりがな	きづいせき		
書名	木津遺跡		
副書名	国道 424 号道路改良事業に伴う発掘調査報告書		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	小林充貴		
編集機関	公益財団法人　和歌山県文化財センター		
所在地	〒 640-8301　和歌山市岩橋 1263 番地の 1	TEL	073 － 472 － 3710
発行年月日	西暦 2015 年 9 月 19 日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
木津遺跡（きづいせき）	和歌山県（わかやまけん） 海南市（かいなんし）　木津（きづ）	30202	53	34° 15′ 65″	135° 27′ 77″	20141220 ～ 20150218	2,389 ㎡	国道 424 号道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木津遺跡	集落跡	鎌倉時代	土坑、溝等	土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦等	瓦は焼成が甘く、磨滅気味であるが、軒平瓦、軒丸瓦が出土している。瓦器片が多量に出土しているが、時代判定可能なものは少量である。
		室町時代	土坑、溝、通路状遺構、掘立柱建物	土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦等	瓦は焼成が良いものが多く、品質が良いものが出土している。少量ではあるが中国製青磁が出土している。

要約	大量の瓦が、周辺の瓦葺きの建物の存在を示唆するが、今回の調査範囲では見つからなかった。瓦は大まかに 13 世紀中頃ー 14 世紀初頭のものと、14 世紀中頃～末頃のものに大別される。土器に関しては 13 世紀～ 15 世紀のものが出土している。 7 棟確認できた掘立柱建物跡の柱穴の埋土からは、焼けた壁土や炭が出土していることから火災があった可能性がある。掘立柱建物は、今回未確認の瓦葺きの建物に付随するものと考えられ、遅くとも 13 世紀の前半までには存在していたものと考えられる。何回かの建て替えを経て､15 世紀以降に廃絶に至ったものと考えらる。その後、調査区より南西方向、舌状に広がる丘陵の標高の高い位置にあったと考えられる遺跡の中心部から出た不用となった瓦、土器などを低い方向の造成に使用した可能性がある。

木津遺跡

－国道 424 号道路改良事業に伴う発掘調査報告書－

発行年月日：2015 年 9 月 19 日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市岩橋 1263 番地の 1

印刷・製本：株式会社　協　和
和歌山県海南市南赤坂 5-3